

17.FEB.1934

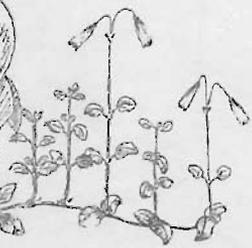
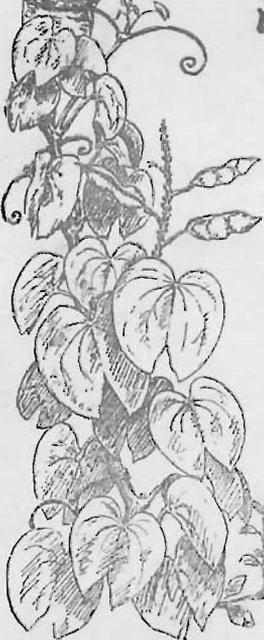
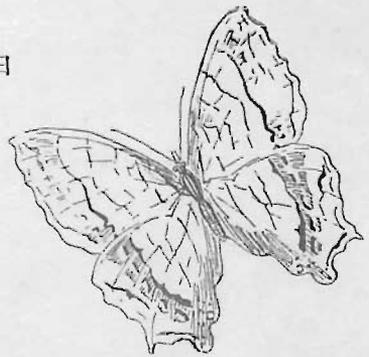
Syuzi



# 宮崎リネ會報

第八號

昭和九年三月一日



宮崎高等農林學校宮崎リネ會

# 宮崎リンネ會報第八號

## 目次

### 口 繪

畸形植物 ..... 〃

### 論 說

畸形植物 ..... 岩 切 芳 郎 ... (603)

リウキウマメガキ日向に産す ..... 宮 澤 文 吾 ... (621)

宮崎縣産莎草科植物目録 ..... 岡 安 文 雄 ... (624)

宮崎菌蕈類目録 ..... 野 口 等 ... (618)

本庄町附近植物目録 ..... 後 藤 弘 ... (631)

双石山植物目録 ..... { 幾 竹 正 實  
徳 村 初 男 ... (635)

宮崎市附近の水生植物目録 ..... 猿 渡 純 義 ... (639)

青島及び富高附近の海藻目録 ..... 田 中 一 ... (641)

本校農場雜草目録 ..... { 田 中 初 一  
徳 富 村 男  
富 木 雄 彰 ... (643)

一ツ葉附近植物目録 ..... { 新 名 正 憲  
七 鈴 田 安 治  
財 部 政 利 市 男 ... (646)

下北山麓植物目録 ..... { 野 中 武 義  
岡 田 道 夫  
猿 安 文 雄  
渡 純 義 ... (648)

淡水藻「かばたけ」に就て ..... 加 峯 實 ... (651)

宮崎縣南部の魚類 ..... 林 正 一 ... (655)

青島貝類目録追補 ..... 大 賀 勉 ... (656)

宮崎附近蝶類目録 ..... 王 寺 幸 寛 ... (658)

宮崎市附近の蛾類 ..... 山 口 鼎 ... (661)

宮崎市附近昆蟲目録 ..... 中 野 正 隆 ... (665)

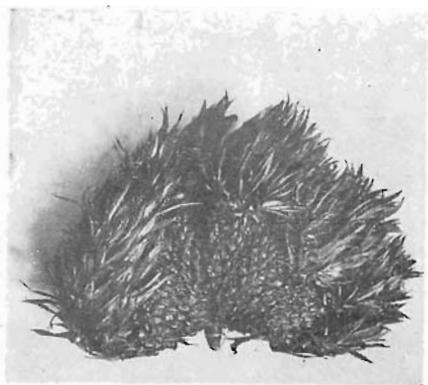
青井岳昆蟲目錄 .....	楠 本 健 二	… (669)
優 曇 華 .....	四 本 正 秋	… (672)
宮崎縣のひる及びみみずにて就て .....	村 木 香	… (674)
宮崎市附近の蜘蛛類 .....	矢 野 次 郎	… (677)
宮崎縣産鳥類目錄 .....	赤 司 覺	… (679)

## 要 録

硫黄華による鳥類の白化 .....	別 府 豊	… (681)
マユハキタケ青島に産す .....	日 野 巖	… (681)
十二月三十日にイシガキテフを獲る .....	日 野 登米雄	… (681)
ニガクリタケの中毒 .....	遠 藤 茂	… (681)
オホノムシタケ米良に産す .....	日 野 巖	… (681)
オホヌカキビ青島村に産す .....	遠 藤 茂	… (682)
マユハキタケ行勝山にも産す .....	遠 藤 茂	… (682)
挿木で出来た竹林 .....	日 高 醇	… (682)
鐘 掛 松 .....	日 高 醇	… (682)
金明竹の産地 .....	日 高 醇	… (682)
シマヘビミトカゲの闘争 .....	日 高 醇	… (682)
宮崎市附近産蟲類二三 .....	伊地知 重基	… (683)
内大臣山の昆蟲 .....	岸 本 清三郎	… (683)

## 會 記 事

宮崎縣ヲネ會略史(承前) .....	幹 事	… (684)
編輯後記 .....	幹 事	… (698)



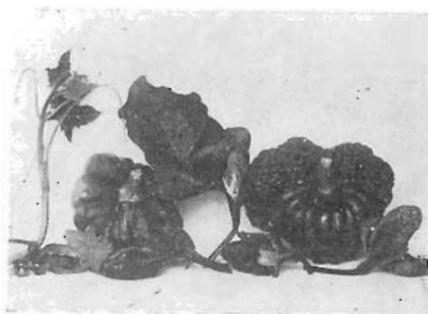
寫 真 一



寫 真 四



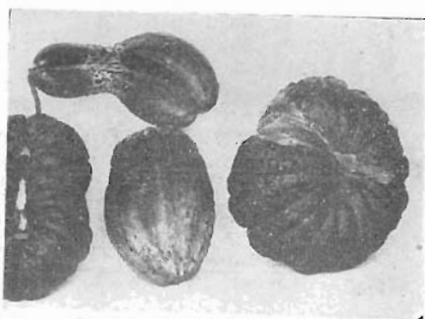
寫 真 二



寫 真 五



寫 真 三

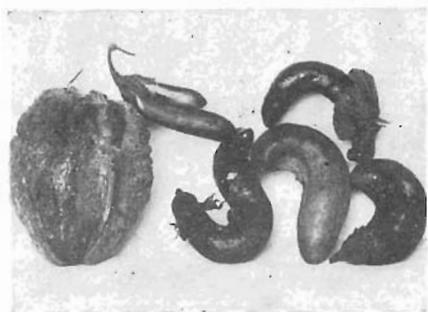


寫 真 六

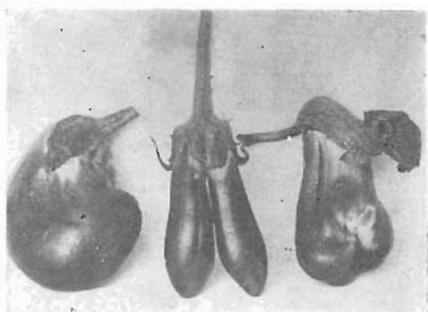
寫真七



寫真十



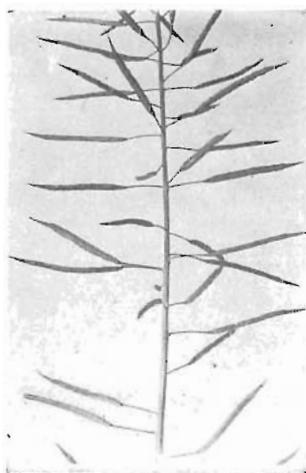
寫真八



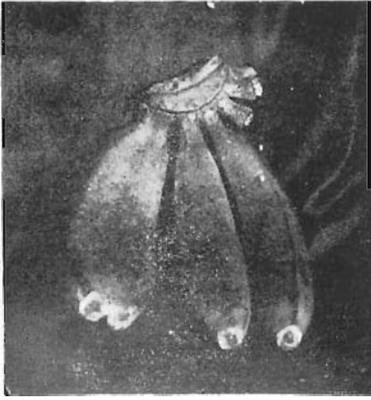
寫真十一



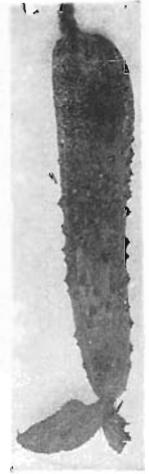
寫真九



寫真十二



寫真十三



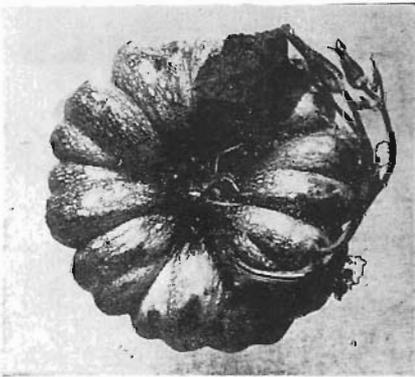
寫真十五



寫真十四



寫真十七



寫真十六



寫真十八

## 宮崎リンネ會報

Annals of Miyazaki Linnean Society

第八號

昭和九年三月

## 畸 形 植 物

農 三 岩 切 芳 郎

植物はよく觀察すると、屢々その植物本來の常態と異つた形態、或は色觀を呈する事がある。白井光太郎博士は、此の變態を大別して三つに分けて居られる。第一は畸形で、その變狀を子孫に傳へないものを云ひ第二は變異で、その變性を子孫に遺傳さすものを稱し、第三は病態で、植物の病氣に依る病的變狀、而して白井博士に従ふと、畸形の定義は、畸形とは植物の全体若くは一局部に現れる形態上の變狀にして、不規則なる成長と發育に基くものであるが、之の變狀は子孫に遺傳することなく、且つ生理的障害少きものである。例へば器管の大小、長短、員數等に相違を生ずる場合の如きが是れだと云ふ事になつて居る。

然るに三好理學博士は、この植物の變狀を植物の畸態と稱し、植物体が異常の形態、色、性質等を現したもので、是れは全く病徴でなく、唯異常の發達を爲せるに過ぎずと述べられて居る。従つて三好博士の畸態は白井博士の畸態と變異を總括した様なものであるが、私の茲に述べる畸形植物は、三好博士の畸態に相當するものであつて、白井博士の所謂純然たる畸形だけでない事を豫め申上げて置き度い。

植物の畸形は、一般に野生の植物に於いてよりも、栽培植物に數多く見受けられる處であるが、特に園藝植物に於いて著しい。之れは寧ろ好んで畸形を求めると爲である。

畸形植物は昔から多く知られて居り、且つ愛養されたのであるが、特に或る時代等は非常に珍重せられ賞玩された。その結果として遂に畸形

植物の大流行となり、流行は更に新畸形を續々と産み出すと云つた具合で、一時畸形植物界は、非常なる大發展を來したのである。その時代出版された「草木奇品家雅見」「草木錦葉集」を見ても、如何に當時園藝上畸形植物、殊に斑葉が、多く作られ持囃されたかが想像出来る。併し流行には得てして盛衰が作ふもので、一度之の流行が衰へると、性質の弱い畸形植物は先づ第一に亡びる運命に置かれる譯で、其の結果非常な珍奇な畸態が、その愛養家と共に次第に世間から多く姿を消して仕舞つた事は、何んと云つても惜しい極である。然し全く無くなつて居るのではない。

今日でも尙色々の畸形植物が、園藝的に愛玩培養されて居るが、殊に斑葉はその主なるもので、蘭類の或る者の如きは實に驚くべき高價なものがあり、其他萬年青、萬兩、生長蘭等でも種々雑多な斑葉畸形がありこんなものもあるかと思ふ場合も少くない。

一般に畸形植物と云つてもその變狀には色々に變つたものがあつて、多くの種類に區別されて居る。即帶化、枝垂、尾化、線化、囊化、葉化雜形、斑入、貫生、複瓣、複萼、蕊化、複葉、分裂、癒合、柱瘤等色々あるが、以下一應此等を簡單に説明し、説明の順序に従つて、私の採集調査した畸形植物に就いて詳述する事にしやう。

### 1. 帶化

これは畸形植物中で最も普通の變狀であつて、また石化とも云つて居る。周知の如く植物の生長點は、一ヶ所であるのが、原則であるが、この原則を破つて生長點が多数に並んで生じ、しかも不規則に連続して扁平となり、恰も帶狀の觀を呈する場合がある。之が帶化の現象で、帶化と云ふ名も此處から名付けられたのであらう。

帶化は一般に莖や枝に多く發生する現象で、稀れに花にも現れる事がある。莖や枝に生じた手近い好例として知られて居るのが、樹木で、マツ、マキ、ミツマタ、ツルウメモドキ、マユミ、ハゼ、ヌルデ、ヌルマモドキ、クワ、サンシヨウ等、草本で、マツバラシ、ミソマメ、ホタルブクロ、ヤマユリ、キジカクシ、メドハギ、マルバハギ、カワラヨモギダイコン、タンポポ、ヤスイカヅラ、キツネノボタン、サハギク、アキノノゲシ、クサギ、ダイズ、オホマツヨヒグサ等で、其外色々な植物に現はれる様である。次に花部の帶化の著名な例としては、彼の鷄頭の花である。一般に鷄頭の平い花は、それが恰も鷄頭の花の常態の如く考へられて居るが、之は先の尖つた鷄頭の花の帶化種であつて、餘りにもそ

れが一般化された結果、却つて上記の様な誤解を生ずる様になつたのである。又鶏頭の外にナバナの花でも帯化が見れるが、私は昨年茄子の花で立派な帯化を見ひ出した。次に最も帯化の珍らしい例として、臺南で調べたバインアップルの果實の帯化があり、これに就いては後で詳しく述べる筈である。

一体帯化の發生する原因は、二通りある様である。一つは生長點の展廣に由るもので、アサガヲの帯化がそれであり、他は數多の枝の癒合に由る場合である。併しその何れであるかは容易には判じ難い。

## 2. 枝 垂

此は文字の通り枝の垂れたもので、枝垂柳、等誰もが知る處であるが其の他枝垂櫻、枝垂梅、枝垂桃、枝垂松等も見られ、其他珍らしいものとしては、枝垂榎、枝垂栗で、特に枝垂栗は野生の狀態に於いて生じたもので、吉江君の話では長野縣下には多く野生して居るそうである。

## 3. 尾 化

之は特に葉のみに表れる變狀である。葉の先端部が叉狀又は數多の細片に切れたもので、従つて葉の巾は廣くなつて居る。尾化は又金魚の尾鱗に似て居る關係上金魚の名をつける様である。例へば植物研究雜誌に久内清孝氏が椿の尾化を金魚椿として述べられて居る。其の他尾化葉はソラマメでも發見され、栽培品にも往々現れることがあるが、私は双石山で金魚羊齒を得た。

## 4. 線 化

その名の通り葉の線狀に變化し、丁度糸の如くなつたもので、錦糸南天はそれである。又花瓣が線化して狹細となる事もあり、セイカイツツヂ等がそれに屬する。

## 5. 囊 化

囊化とは、葉面が凹入して袋の様になつたもので、をの名を頂戴して居る。三好博士によれば、ウツボグサ、サラセニア、ダーリングトニアの瓶子葉、又アケビカツラの茨狀葉は代表的な特徴であつて、純粹な囊化とは云いがたいが、ヘンエウボクの匙形葉は一種の囊化と云はれて居る。次に囊化の顯著な例は、クリシナボクが擧げられて居る。之はボダイジュから偶然に生じたもので、普通の囊化と異り葉の裏面が袋狀に變化した點で珍らしい。次に之のクリシナボクに匹敵する好例として、我校に發生した囊化公孫樹がある。此に就いては雜誌「植物及動物」で宮澤先生が詳細に發表されて居られる。

## 6. 葉化

葉及萼の全部又は一部が葉狀に變つたもので、花瓣の葉化は複瓣の櫻梅等で見られ、萼の葉變は私の調査の結果では、桃、茄子でも發見された。

## 7. 雜形

葉や果實の形が種々に變ることで、三好博士は、葉の場合では變葉梧桐が最も著名で、果實はジャバでココヤシで見出されたそうである。

## 8. 斑入

葉又は稀れに幹に斑の入つたもので、その斑の形に大小あり、又斑點があるかと思ふと線、縞があり、一方色彩に於いても白斑の外に、黄、赤、紫、藍、墨斑等がある。

特に斑葉は總ての植物に現れ、我が校庭にも宮澤先生の手により數多の種類が栽植されて居り、畸形の内でもその數に於いて王座を極めて居る。又斑葉を生ずる原因に就いては、山田立太郎博士が鳥取農學會報で詳細に述べられて居る。

## 9. 實生

花の中に更に花を生ずるものを云ふので、従來菊の貫生、雛菊の貫生等は有名である。私も今度模範的な金盞花の貫生を得た。又松虫草の貫生も幸ひ集める事が出來た。貫生の事は一名複花とも呼んで居る。

## 10. 複瓣

之は園藝植物では通俗な畸形で、花瓣の數が増加したものである。即ち普通に云ふ八重、二重の花で、譬へば八重石南、八重躑躅、八重櫻、八重梅等、又二重桔梗等園藝品では枚舉に遑がない。此の複瓣の發生の原因は、單に瓣の數の増加のみでなく、萼や雄雌蕊の花弁に變じてその數を増されたものである。

一方私は野生のキンポウゲで、色々な複花を見た。

## 11. 複萼

萼が定數よりも増加したもので、たまには瓣の半ば萼狀に化したものもある。又別々に複萼を生ずる事もある。

## 12. 蕊化

或る意味では複瓣の逆で、花瓣等が雄蕊に化するを云ふ。従つて其の數を増すものだが、その著例としては金蕊躑躅等が上げられて居る。

## 13. 複葉

葉、特に子葉に現れるもので、葉の定數より多くなつたものを云ふ。

私は朝顔、糸瓜等で此を目撃した。

#### 14. 分裂

常態の一果實及一花瓣、一花托等が、二つ又はそれ以上に分かれるものを云ふので、佛手柑、妙蓮、又柿の果實や朝顔の花で見受ける。

#### 15. 癒合

分裂の逆に果實又は花の互に癒着したものである。即ち離瓣花の瓣が癒合して單瓣花となり、又二つの花部が合着して一体となる等である。その今日知られて居る著例は、デキタリス、タンポポの癒合花、及び赤松の實の合着等知られて居る。私はバナナの癒合を見付けたがこれは後の各論で説明する。

#### 16. 柱瘤

之は稀れな變狀で、莖や根に瘤狀のものの發生するものである。此の中には寄生物による病的發生が多いが稀れに先天的のものがある公孫樹の幹から生ずる乳房の如きはその好例であるが私は不幸にして未見である

以上で畸形植物の種類の大体を述べたが、次に私の採集調査したものに就いて、上記の分類に従ひ順次に述べる事にする。

### 帯 化 の 部

#### 1. パインアップルの果實の帯化

パインアップルの帯化は、多くの場合果實の上部の芽に現れる様であるが、此處に御紹介する帯化種は、パインアップルの實の眞の帯化であつて、他にその例を見ない珍品である。之の珍種は昨年春台湾を訪れた際台南で初めて見たもので、パインアップルとしては極めて珍らしい現象だそうである。口繪寫眞で見られる様に數個の果實が連續融合して扇狀を呈し、芽も亦澤山分岐して居る。

帯化を述べるに當り、先づ第一に記載しなければならぬ代表的な實例である。

#### 2. 一位の帯化

之の實例は、宮崎女子師範學校前の某氏の邸前に植へられて居る一位の樹の若莖に表れて居るもので、一昨年來面白い現象であると注意して居る所である。

#### 3. 柳の枝の帯化

本校の水田に行く途中に有る柳に發生した珍現象で、植物に興味を持つものは、必ず一度は立ち止つて眺めて行く位異彩を放つて居た。私は

入學當初から興味を感じて居たが、昨年の初め何人の心なき技か、無慘にも切り倒されて跡形もなくなつて仕舞つた。失望落膽したのは私ばかりではあるまい。然るに幸ひなる哉、切り残された其の切り株から芽立つた若木の新枝に、再び以然と同じ帯化が現はれた。救はれたる標本よ私は直ちに其の一枝を頂戴して標本を作つた。それは忘れもせぬ昭和八年六月の二十九日であつた。

#### 4. 蕃茄の花の帯化

昨春私共が引き受けたクラスの擔當地は、畸形學の見地からして、誠に畸形植物の寶庫であると云つても過言でないほどの大した獲物であつた。色々の畸形が限りなく現れたが、其内に此の蕃茄の花の帯化があつた。而もそれが、その畑に植へられた殆んご全部のトマト苗の最初に咲く第一花に現れたのだ。花の一つ一つにより帯化の程度に差こそあれ、殆んご畑全部の花が帯化するとは、全く天下稀れに見る蕃茄畸形の群落である。流石に擔任の清山先生も驚嘆自ら失するの有様であつた。

本畸形をその形態につき詳細に調べると、既に一部のものは莖が帯化して居る。尙一層珍らしい事は、花の帯化の第一花だけに生ずる事で、殆んご總て第二花以後は平常の花であつた。又帯化部からは平常花の第二花が、數個發生して居た。果して將來之の物が、結果するか否かに就いて注意したが、大部分は成熟して、帯化の果實が得られた。寫眞二は昭和八年五月に撮影したものである。

#### 5. 茄子の花の帯化

之も前と同じく擔當地の茄子畑に偶然に發生したもので、實に模範的な茄子の花の帯化である。即ち花梗も萼筒も帯化して廣い扁平となり、萼片及花瓣は帯化したため、數は非常に増加して三十位も數へられる。又子房も伴つて平くなつて居た。昭和八年六月五日採集。

#### 6. 茄子の實の帯化

これは前記5の様な花の帯化種が生長して出來上つたものであらう。茄子の果實の帯化である。口繪寫眞十一は昭和八年六月二十四日に撮影したものである。

#### 7. 石化朝顔

石化朝顔とは、朝顔の莖の帯化したもので、莖は横に廣くなつて居るが、葉には何等異状はなく、定所から常葉が發生して居る。石化とは帯化の別名で、園藝上良く用ひる言葉だ。莖は以上の様に帯化した爲め朝顔本來の纏繞性を失ひ、物に巻き着いて登る事が出來ないが、莖が丈夫

となつて居るために差支へはない。本種は宮澤先生の藏品で、昭和八年の夏、實驗されて居るのを調べさせて頂いた。

### 8. 鶏頭の花

説明省略す。

## 枝 垂 の 部

### 1. 枝垂櫻 2. 枝垂梅 3. 枝垂柳

何れも本校にあり説明を略す。

### 4. 枝垂桑

本校の桑園にも栽植されて居るが、私は本校のを見る以前に、親戚の庭園でも見た事がある。即ち立つて生長すべき桑が、枝垂になつたもので奇觀を呈して居る。

### 5. 枝垂桃

古城村の百姓家の庭先に植へてあるのを見た。

## 尾 化 の 部

### 1. 朝顔の子葉の珍態

昭和八年の春栽培のため播種した朝顔から表れた現象で、子葉の尾化である。御承知の通り普通の朝顔の一枚の子葉と云へば、先きが二つに分かれて居るのが當然だが、この畸形の形態はそれが一つ増して三分岐したもので、口繪寫眞の三の右苗の如き形状である。

### 2. 蕪青の子葉の尾化

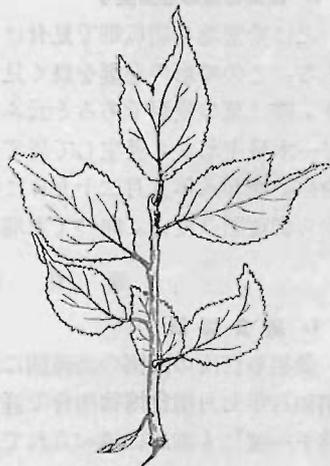
前の朝顔の場合と全く同じ尾化であるが、事務所の前の苗床の蕪青の子葉に現れた。之も前者と同様一方の子葉のみが尾化して居る。これは昭和八年九月二十五日調査した。

### 3. 朝顔子葉兩尾化

1.の場合の念の入つたもので、二枚の子葉が共に尾化して先が三つに分かれたものである。これは昨春、卒業論文に用ひた材料の朝顔の内からの偶然の獲物である。

### 4. 尾化梅

私の培養して居る垂枝梅の或る枝に



(第一圖)

昨春發生した尾化葉で、その形態は恰も分裂に屬する様な形を呈して居る。第一圖で御分りの様に、一葉の先が分かれて叉狀となつて居るが、斯かる尾化葉が二葉だけ發見された。これは昭和八年五月二十八日に調査したものである。

#### 5. 櫛の双葉

之は或は癒合の方に廻すべきものかも知れないが、私はそれが葉に現れたので尾化として述べる事にする。本種は昭和八年六月十九日、例の通りバスに乗るべく神宮前の圓森の前で待つて居た時、不圖側の櫛で見出したものである。何氣なく眺めると櫛の双葉だ。直ちに先づ宮を拜して拜借した。一寸珍しい尾化櫛である。

#### 6. 蕪青尾化葉

苗床で培養中の蕪青本葉の尾化である。之の苗は本葉四、五枚出て居たが、その内一枚先端部が叉狀に分離し、尾化葉となつたものである。本品は昭和八年十月十五日に調査した。

#### 7. 實生葉の双葉

松原先生の實驗用實生粟の一葉に表れた畸形で、粟としては珍しい現象であらう。即ち双葉と稱すべき形狀を備え、一葉の途中から主脈が分かれて、それから以後は立派な二葉となつて居る。口繪寫眞四は昭和八年五月三十一日に撮影したものである。

### 線 化 の 部

#### 1. 胡瓜の葉の卷髮變形

之は擔當地の胡瓜畑で見付けた胡瓜の葉の卷髮に現れた面白い畸形である。この畸形の卷髮を良く見ると、普通のものとは異つて基部に節があり、確に葉の變形であると云ふ事を證明して居る。しかも之の卷髮だけが一本發生部から發生して居て、外は何一つしも着いてない處が更に面白い。昭和八年五月二十九日に他の畸形と一緒に口繪寫眞五に撮影したから御覽願ひ度い。向つて左端がそれである。

### 囊 化 の 部

#### 1. 藪公孫樹

農場事務所の西側の公孫樹に表れた珍葉で、之に就いては宮澤先生が昭和八年七月例會博物學會で詳しく語られ、又「植物及動物」の第一卷第十一號にも細かに述べられて居る。私は昭和八年六月に採集したが、公孫樹の葉の囊化して袋狀と化したもので、その形狀及び程度に様々あ

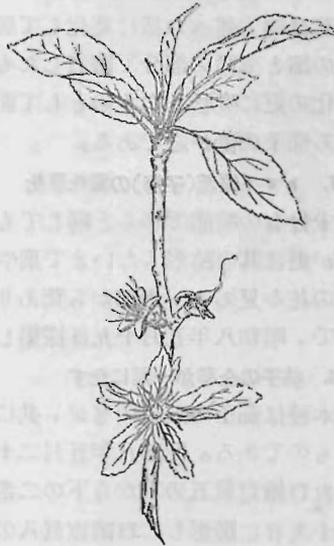
り、世上稀れなる珍品だ。一應實物御探究を乞ふ。

## 葉 化 の 部

### 1. 桃の萼の葉化

桃として無二の珍畸形であらう。之は親戚の内の桃の一花に生じた興味深い現象で、五つの萼片が悉く皆完全に葉に成りきつて仕舞つて居る本品は昭和八年四月下旬採集したものである。(第二圖参照)

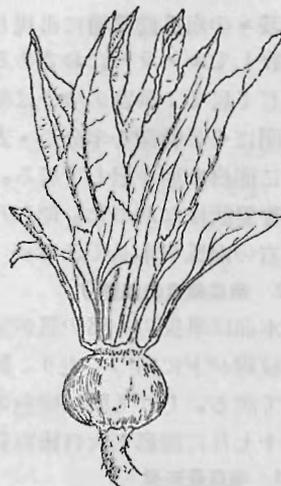
(第二圖)



### 2. 雌花南瓜の萼の葉化

擔當地で見付けた代物で、萼が退化して葉と變つたものだ。特にその一枚は尾化して先が叉状となつて居る。しかも更に奇妙な事は、萼も花瓣も六枚ある事で、正態より一枚だけ増數して居る。昭和八年五月十七日採集。(第三圖参照)

(第三圖)



### 3. 茄子の一萼片の葉化

本種は農場擔當地茄子畑で出現した畸形だが、之の外本畑には様々な畸形が見受けられ、實に畸形植物の群落であるとも云はれる。此處に發生した畸形に就いては順を負ふて説明しよう。處で本種は只一萼片がそれはそれは完全な普通葉に變じたもので、これは昭和八年五月十九日に調査した。

### 4 茄子の數萼の葉化

前者の少しく進展したもので、數萼が葉と變り、一部の萼は依然としてその原形を保有して、萼の形を備えて居る。前者と共に同日採集した。

### 5. 茄子の全萼葉化

之の物は前者の今一層進んだもので、

全部の萼が一つ残らず葉に變つたものだ。良くも斯く迄で變つたものと驚く位に立派に葉化して居る。昭和八年五月二十九日に撮影した口繪寫眞五の右下のものが本種である。

#### 6. 萼の葉化と一葉の花に着合

萼は前も述べた様に葉化して居るが、更に花に最も近い常一葉が、葉柄の部と萼筒の部分で密着したもので、一風變つた形狀を呈して居る。葉化の更に畸形したものとして面白い。口繪寫眞五の南瓜と南瓜の間にある茄子の蕾が之である。

#### 7. トマト雌蕊(子房)の葉化萼化

未曾有の畸態であると稱しても過言であるまい。上述した帶化花の雌蕊が更に其の跡形もないまで葉や或は萼に變化して仕舞つたものだ。即その花を見ると、内部から葉あり、萼あり、雄蕊あり、花瓣あり、萼ありで、昭和八年五月十九日採集したものである。

#### 8. 茄子の全萼が一葉に化す

本種は茄子の五枚の萼が、共に綜合して一枚の廣い完全な葉を形成したものである。昭和八年五月二十九日採集し、寫眞に撮したが、前に掲げた口繪寫眞五の右から下の二番目の花が本品である。更に昭和八年六月十九日に撮影した口繪寫眞八の右の上の果實も本種である。

### 雜 形 の 部

#### 1. 南瓜のカメラ

我々の南瓜擔當地に出現した怪物で、實習中發見した。早速農場より買収してカメラにおさめる。本種は所謂カメラと稱へられる形態を存じて居て、果實の半分は菊座南瓜、跡の半分は縮緬南瓜である。夫れも明にその特徴を半分づゝ表して居るので、その境界が判然として居り實に面白い形を呈して居る。之を切斷して内部を検した處が、内部には何等異狀はなかつた。昭和八年五月二十九日撮影した口繪寫眞五の向つて右の南瓜が本品である。

#### 2. 南瓜果實の肌變り

本品は果皮の一部の肌が變色し、しかもその部に莖の延長とも思はれる縦線が下に向つて走り、臍部で葉を着けて居たらしく、その枯葉が残つて居る。しかも肌は變色のみでなく、がざがざして居た。昭和八年六月十七日に撮影した口繪寫眞六の本品右端の南瓜が本品である。

#### 3. 南瓜長形果

前者二種と同じ畑に生じた雜形で、形が非常に長くなつたものだ、他

の普通のものの特に目立つて異り、外見上も又種々な點で變つて居る。  
(口繪寫眞六の中央の果實)

#### 4. 蕃茄の葉柄から發育枝發生

實に奇妙な事もあるもので、葉の葉柄の處から芽を發生して居る。これも擔當地に發生し、昭和八年六月五日調査した。

#### 5. トマトの珍再生

之は農場の蕃茄に見出したものであるが遠藤先生も同様な現象を自宅の蕃茄で觀察されて居る。即蕃茄の苗が二尺位になると花を無數に着けその生長部は從つて失はれて仕舞ふ。それではその苗の壽命もそれまでかと思つて居ると、仲々何して、一花梗から勢力のある莖を出し、再び生長點を作る。若し此の際放任して置けばそれまでだが、之を支柱にゆわへ立ててやると、恰も主莖の如き勢で伸び、依然として生長するのである。然し何んと云つても花梗から生じた莖だから、その部分が貧弱だ昭和八年六月十日撮影した口繪寫眞七を御参照下されば良く分る。向つて右が畸形で、左は常態だから比較して見て戴き度い。

#### 6. 茄子果實の小突起物發生

擔當地の茄子で發見された畸形で、成り口から溝を生じ、それが實の途中の處で飛び出して小突起物となつて居る。又果實そのものもU字形に曲り面白い。昭和八年六月十九日に撮影した口繪寫眞八の中間にある茄子がそれである。

#### 7. 茄子の變狀

之も前者同様果實の一部が膨れ出たもので、寫眞八の右端は之れであるが、寫眞では前方の光つて居る部分がそれである。又本種は特に光端の皮部が褐色に變つて居る。

#### 8. 茄子莖尖端花變り

莖の頂部の生長部が一つの花に變つたもので、非常に面白い。從つてその莖は生長點を失つたため、生育を停止した形で頗る奇妙である。

### 斑 入 の 部

#### 1. 茶の斑葉

水田の茶採實習中現れ出したもので、葉の立派な白斑であつた。捨ててはならぬ枯してはならぬと事務所の手洗に漬けて置いたのに、腕白小僧のため盗まれて仕舞つた。實に惜い事だ。

#### 2. 大根の白斑

大根擔當地に、それはそれは實に見事な白斑が一株現れた。葉は目も

醒める様な濃緑と白との斑で、その対照が極めて良い。而も或る一葉に至つては、全葉美麗な白葉で、少し黄味を帯びて居る感があつた。

### 3. 白斑白菜

之も亦見事な白菜の白斑で、擔當地の數多い株中、只一株に生じた。私は以前黄斑はしばしば見たが、斯く純白な斑は曾つて見た事がない。實に奇麗な斑葉だ。

### 4. 南瓜の果實の斑入

本品は果實に斑の入つたもので、花梗から果皮に向ひ黄、白、淡緑等の斑が、縦に下の方へ縞の様に住つて居る。昨年農場生産物の一果で、昭和八年五月二十九日カメラにおさめた。口繪寫眞五の左の南瓜は本種で、多少は斑が覗はれる。

其他斑入は色々あるが省略し、只自然に發生した斑入に就いてのみ、以上三、四記して止めて置く。

## 賞生の部

### 1. 金盞花の一部賞生

野中君の寄贈による栽培品に現れた金盞花の複花だ。即一つの花の花托部から三本の花梗を出して、その内一本が開花し、二本は蕾であつたこれは昭和八年五月二十三日に採集した。

### 2. 金盞花の珍賞生

同じく野中君宅に發生した珍奇な賞生で、前者の今一層猛烈に賞生化したものだ。口繪寫眞九で御覽の通り、花に更に第二の無数の花梗を生じ、種子は出來ず、子房は悉く花に變つて居る。更に妙な事は、その發生した花梗が帶化して居たり、或は分裂又は癒合して居る事で、畸形の畸、世に又となからう珍の珍であらう。

### 3. 姫薔薇の賞生

校庭に植へられた姫薔薇の花の子房が、その役を捨て蕾と變り、更に花を開くと云つた具合の代物で一寸面白い。花に花が咲くとは之の事だらう。昭和八年五月二十五日採集。

### 4. 松虫草の賞生

吉江君の寄贈で、松虫草の立派な賞生だ。何んでも三、四の花梗を出し、夫れも花を付けて居る。

### 5. 水仙の賞生

私の栽培品中に表れた二重水仙の賞生だ。即二、三本の花梗を生じ、

一花瓣を着けて居る。

#### 6. 菊の枝語り

世にも稀れな菊の新畸形だ。恰も貫生の如く、三好博士の記載では、花的腋間貫生に入るかも知れないが、宮澤先生の御高説では、枝の詰つたものではないかと申されたのでそうして置く。昭和八年十一月十日野中君より寄贈して頂いたものである。(口繪寫眞十参照)

### 種 變 の 部

#### 1. 胡瓜の花の八瓣

胡瓜の花瓣の数は五ヶあるべきだが、之が八ヶまで増したものである。其他六瓣、七瓣のものも見受けた。本種は昭和八年五月二十九日撮影した寫眞五の右側にある花である。

#### 2. キンボウゲの複瓣

之には色々の變異があり、常態の五瓣のが、双石で調べたのは六瓣、八、十、十二瓣があり、青井岳では、九、十五等を見受け、殆んど八重になつて居た。

#### 3. キツネノボタンの複瓣

キンボウゲと同じ現象を、キツネノボタンでも各地で見受けた。

#### 4. 茄子の萼の花瓣化

茄子の萼の葉化は、葉化の初めて述べた様に實に多かつたが、本種は更に進んで萼が花瓣まで一躍進したもので、妙な花が出来上つて居る。之を細に観察すると、確實な萼が三片、次の二萼片が一側が各々花瓣に變つて居り、又立派に葉に成つたものが一萼片、更に完全に花瓣化したものが一萼片ある。それに更に今度は一萼片で、萼、葉、花瓣と順次に變化して居るのが一萼片あり、實に面白い代物だ。

#### 5. サフランモドキの複瓣

校庭に植へられたサフランモドキの多瓣化で、普通六瓣六蕊であるべきものが七瓣七蕊、八瓣八蕊の二畸形を見受けた。

其の他複瓣には、水仙、茄子、南瓜、蕃茄、等實に數多く調査したが同じ様な事だから省略する。

### 種 葉 の 部

#### 1. 朝顔子葉の珍態

定数の二枚であるべき朝顔の子葉が、三枚となつたもので、即一枚だけ増したものである。之は栽培品及卒業論文に用ひた資料中にも發見さ

れた。寫眞三の左の方は本種である。

### 2. 糸瓜の子葉三枚

前と全く同現象で、糸瓜の子葉が三枚に増加したものである。此は野中君の贈呈によるもので、氏の話ではこの性質は遺傳する想である。(第四圖)

### 3. 蕪青の四子葉

蕪青にも三子葉は多く發見したが、之は子葉が四枚になつたもので、二本分を一人で備えて居ると云つた具合、昭和八年十月五日苗床で採集。

## 分 裂 の 部

### 1. 松の芽立ちの分裂

世にも珍らしい松の畸形で、之は青井岳採集の際に得た代物である。その形態は、松の一つの芽立ちが途中から分離して二本となり、又或の芽の如きは五本にまで分裂して居た實に面白い珍品と思ふ。現在は腊葉として保存してある。

### 2. 甘藷の双生

甘藷の芋の分裂で、一芋が恰も二つの蔓を縦に結び着けた様になつたものだ。一寸面白い形態だ之は住吉牧場で甘藷芋の選別の時發見したものである。(第五圖参照)

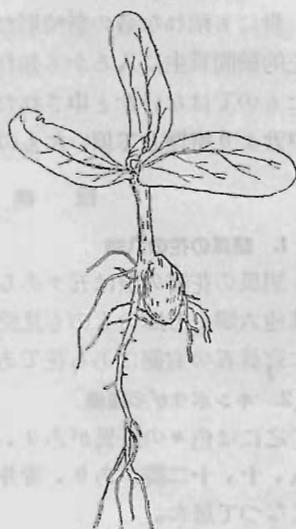
### 3. 甘藷の瓢箪形

之は同じく牧場で見出したもので、即芋が丁度瓢箪の形になつたものである。之の起つた原因につき内部を調べたが、分裂か癒合か判断し難い。要するに見事な瓢箪形で面白い。(第六圖参照)

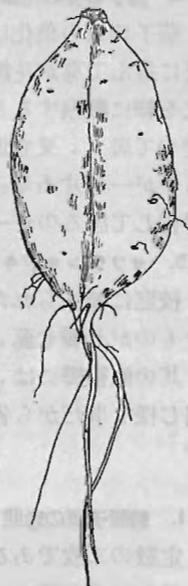
### 4. 茄子の分裂

擔當地の博多長茄子に表れた果實の分裂で、果實が途中から二股となり、二つの果實となつて居る。而して一方は小さく、他は之に比して大きく約五倍もある。昭和八年七月四日採集。(第七圖参照)

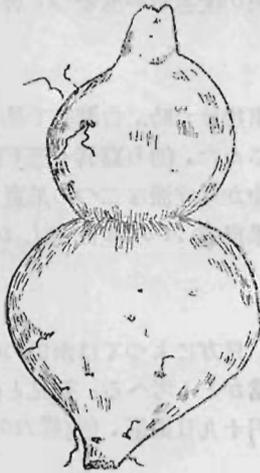
(第四圖)



(第五圖)



(第六圖)



(第七圖)



### 5. 茄子の双生

本種は前者と異つて居て、分裂としては一層珍らしくはないかと思ふ。即花梗は何等變化なく、萼の部で初めて二果に分裂したもので、完全な二つの果實となつて着いて居る。昭和八年六月二十四日採集。(口繪寫眞十一参照)

## 癒 合 の 部

### 1. 茄子の花の融合

擔當地の茄子に表れた畸形の一種で、茄子の花としては珍しい。即ち二つの花の融合で、一花梗に二つの花が融合して着いて居る。而してその一方は既に開花し、花瓣は褐色に變化して居るが、他方は未だ蕾で今からが華だ。又莖は多少総れ氣味で、細かに見ると帶化して居る。スケッチ。腊葉。

### 2. 茄子の珍花

前者と類似品であるが、特に本品を求めたのは前者より形状の明白であること、尙亦萼片が一部は葉に、一部は花瓣に變り、畸形學上見るべき値價が大であつたからである。

### 3. 囊舌の花梗の位置變狀

日野先生の所有で、養成所學生の採集品と聞く、之は莢が花梗の處で

二本が癒合したものである。其他癒合とまでは行かないが、相当接近して居るのも見受けられ、普通のものと同様の配置が一風變つて居て面白い（寫眞十二参照）

#### 4. バナナの癒合

之は母を伴ひ祖國日向博覽會見物に出掛けた時、台灣館で見付けた代物で、直ちに求めて歸りカメラにおさめた。即ち寫眞十三で御判りの様に二果の癒合であるが、皮をむくと中から立派な二つの果實が出て來二人前完全にあつた。こうなると單に果皮のみの癒合としか思へない。

#### 5. 南瓜の完全な双生

清山先生より頂戴した珍奇な果實だ。見方によつては南瓜の帶化とも思はれるが、二果の癒合とした方が至當かとも考へる。初見とは云へその形態には流石に驚いた。昭和八年六月十九日撮影、（寫眞六の左端）

#### 6. 茄子の珍双生

茄子畑の佐土原長茄子で發見した畸形で、二果が萼部及び花梗部で明かに融合して居る。但し果實部は少しも融合して居らず、立派な二果だそして一方は大きく、他方は小さい。昭和八年六月十九日採集。（寫眞八の左上のもの）

#### 7. 胡瓜の不完全双生

胡瓜の果實の變態で、若い時分は二つの雌花の融合であつたが、その内一方は生長したるにも拘らず、他方は一向に生長の模様なく、従つて双生には違ひないが果實は屈曲して、その部に小さい實を付けて居る。全く子を親がかばつた形で、昭和八年五月十九日採集したもので口繪寫眞八の胡瓜が之れである。

#### 8. 胡瓜の癒合

教員養成所の胡瓜畑に表れた珍形で、前者の様に不完全なものでなく完全な見事な双生だ。即ち二果が立派な癒合して居る。寫眞六の上部の胡瓜は本品で昭和八年六月十九日撮影したものである。

#### 9. 甘藷の癒合

住吉牧場産で、分裂の部の甘藷の双生と同じ形だが、之は癒合として取り扱つた方が適當の様に思はれる形である。

#### 10. 西瓜種子の癒合

之は北海道探勝旅行の際新潟で食つた西瓜の種子で見た双生で、二粒が縦に合着したものだ。内檢して見ると種子は二つあり、一膜で境ひさ

れて居た。

### 珍 形 の 部

前記の畸形の分類で以上述べた外に、其の孰れにも屬し難いものがある。之等を本部に纏めて述べる事にする。

#### 1. 南瓜の雌花の珍形

(第八圖)

南瓜畑で實に稀れな珍重な畸形の資料が得られた。その本体と云ふと、花瓣の約半が葉に變り、萼は悉く消失して居て、しかも子房の一部は瘤狀に縦に隆起し、亦他の一部は葉柄と融合して先きは立派な葉を拵へて居る。この葉は子房の基部から發生し、其處には又更に小さい第二の雌花を着けて居る。更に一層妙なのは、花梗に一雄花を持つて居ることで、古今稀れな雌花の一植物体化である。若しこの花梗部に根が出来たならばおそらく一植物体と言つてもよからう。そうなると花梗及び子房の一部は莖の役目をし、花瓣も半分は葉の役割に當り、實に奇妙な植物体が成り立つ譯になる。(第八圖参照)



#### 2. 胡瓜の實の中程から葉生

坦當地胡瓜畑に出来た代物で、興味ある畸形だ。本品は胡瓜の果實の中程から突然に葉を生したもので、而して其の發生部まで、花梗から縦筋が走り、如何にもくせ物らしい構をして居る。多分維管束の變狀であらうと思ふがはつきりしない。(寫眞十四 昭和八年五月二十二日撮影)

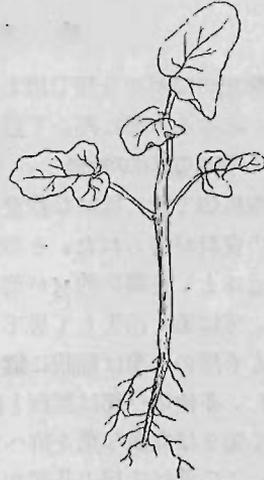
#### 3. 胡瓜の下部より葉生

之は花梗から萼の處まで一線が通つて居り、果實の光端で葉が生じて居る。素人目では萼の葉化とも思はれるが、而し縦筋が前者同様問題である。尙萼の葉化ではないことは、萼や花部の既に枯死して跡形もない事でも明だ。(寫眞十五 昭和八年五月二十四日撮影)

#### 4. 朝顔の子葉の珍態

大輪咲の朝顔に表れたもので、稀れなる葉の變化物である。子葉の形それ自身が既に變つて居り、恰も本葉の様になつて居る。更に子葉は四枚となり、その内二枚が定所にあり、他の二枚は對生して其の上部にある。而してその頂に芽を有する。次に幼莖も帶化して居り實に面白い朝顔の畸形である。(第九圖參照)

(第九圖)



#### 5. 南瓜の果實の珍形

之は1の場合と良く似て居るが、1よりも畸形の變化の程度で劣る。即ち莖が果實の一部まで密着して延んだもので、(寫眞十六)で見る如き形を備えて居る。之は昭和八年六月十五日日高君の寄贈によるものである。

#### 6. 茄子の千成り

昭和八年六月十八日採集した茄子の四つ成りで、一花梗から更に四つの花梗を出し、それに夫々四つの實が着いて居る。而もそれが順次に生長して居るので大小取り混ぜてゐる。(口繪寫眞十七參照)

#### 7. 菊の變り花

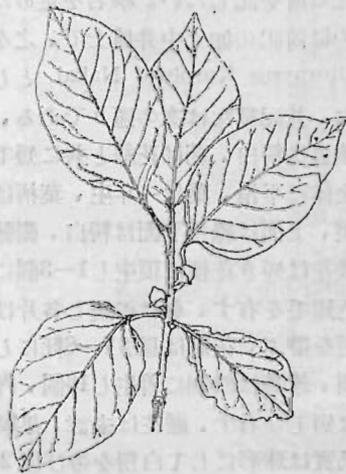
口繪寫眞十八で見られる通り菊には良く見られる現象だが、特に之の場合は明瞭で、而も中心から出た花瓣は、一花瓣の先が多数に分岐し、普通の花瓣と異つて異彩を放つて居る。之は三城商店の食堂に飾られたもので十一月拜借して寫したものである。

## リウキウマメガキ日向に産す

宮 澤 文 吾

昭和8年7月9日林學科一學年生吉江清朗君と二人で田野村の東方山中に分け入った際、丸目山の南方に當り清武村丸目へ出て來る小川の傍りで未だ嘗て眼に觸れなかつたカキを認めた、それは川の面から3米程上つた位置に在つて高さは8—9米幹の周圍は1.5米位はあつたと記憶する一見して葉が普通の柿とは餘程様子が異り果實は此時澤山に見えたが小形でカキでもなくマメガキでもないことだけは判斷し得られた。

そこで歸てから書物を調べて見ると  
 (第一)  
 ぎょうやら中井博士が1921年に植物學雜誌35卷136—137頁に發表されたリウキウマメガキの記載に良く合ふ、併し此記載には果實は點頭すると在るけれど採集した標本で見ると點頭しようにも見えないので疑問として置いた。



其後諸所へ採集に出掛けた際に此カキに就いて注意を拂ふて居たのであるが存外諸方面に分布して居ることが解つた、7月30日に青島村内海の奥へ行った時に溪流に沿ふた所で未だ結果年齢に達しない若い樹の2本を認めた、又7月22日に西白杵郡諸塚村字塚原と七ツ山との間で小溪流に沿ふた場所で二個所に大きな結果して居る樹を認めた、更に8月27日に行藤へ行った時にも何本かがあることを知つた、その一樹は林中に在り随分高くなつて居り然かも何れも水流に近い所に在た。次には9月23日に東白杵郡北方村比叡の山に在る一軒の御茶屋の下方林中で結果して居るのを認めて之を採集することが出來たから、そこで果實の状態を見ると著しい點頭とは謂ひ得られないが横向きになつて居るものもあり又點頭して居るものもあり、要するに7月に見た時の様に直上するものではないことだけは明かとなつた。従て前の疑問は必要のないことになり之はリウキウマメガキと同一物であると鑑定せざるを得なくなつたのである。

其後北諸縣郡高崎村長尾山、同郡西岳村の小池附近でも數本の結果して居るのを認めた。以上は從來に採集した事情であるが注意すべき點はリウキウマメガキは寧ろ水濕を好む樹であると謂ふべきで、是迄に觀察した場所は必ず乾燥地ではないといふことである。

次にリウキウマメガキに就いての研究経過を述べ更に記載文に表はれて居ない點に就いて、筆者の見る所を記したい。學名を定めたのは前記の如くの中井博士で、之を *Diospyros Kuroiwai Nakai* とし



た、其記載文は次の通りである、「葉形はシナノガキに似て居るが併し葉裏は粉白、葯は花絲と共に短毛を有す、果實は熟して食用とならず。全体に平滑、葉は一年生、葉柄は長さ1.0—2.5 糎、葉身は卵形にして凸頭、上面は綠色下面は粉白、側脈は各側5—8、全縁なるも波狀を爲す、雄花は短き花梗に頂生し1—3個にして點頭す、小梗は長さ1 糎にして褐色短毛を有す、萼は四裂し各片は三角形をなし長さ2.0—2.5 糎、外面細毛を帶ぶ、花冠は長さ7—8 糎にして鐘形を爲し平滑、裂片は廣くして鋭頭、雄蕊は四列に着生し16個、内部のもの小形、時として連結す、花絲は短毛を有す、雌花は未詳、果梗は長さ2 糎にして太し、萼片は反轉す果實は球形にして白粉を帶び徑2 糎、頂端は尖り平滑。以上は沖繩島及久米島の標本に依た記載である。

次に筆者の見る所を少し付け加へやうと思ふが花に就いては遺憾ながら未だ觀察することが出来なかつた、最初に得た7月の標本では幼果が皆葉柄に沿ふて斜上向して居て點頭して居なかつたが併し前述の様に果實が生長するに従て點頭の傾向を現はして來る、果實は白粉を帯びるけれども其量は多くはなく熟期に近くと黄色を呈し光澤がある、入室を有し種子は果實の個体に依て其数が一定ではない、熟果の味を試みるに最初は稍甘味を感ずるが後滋味を覺え永く残る。萼の内面には褐色短毛を密生し熟する迄失はれない、縁邊は能く反卷する。種子は長さ1.3 糎位で果實内に於て外部に面した側は半弓形を爲し内部に面した側は殆ど直

線を爲し扁平で厚味は少い、色は濃褐色を帯び光澤がある。諸塚村ではトネリ又はトネガキと呼ぶ、材には黒味を帯びる部分即ち黒柿があると聞いたが普通の柿の材程には宜しくないらしい。

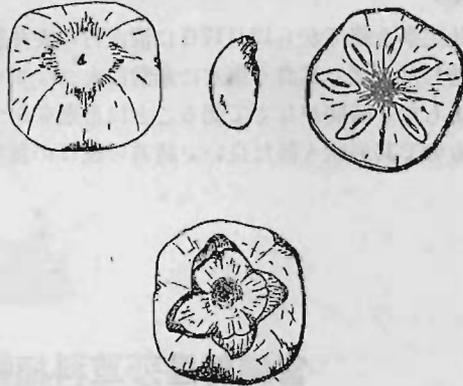
中井博士が最初に命名はしたが此カキに就いては松村任三博士が

先づ以て書かれて居る、即ち中井博士が引用されて居る様に植物學雜誌14卷101—102頁に *D. Lotus* Linn. の名で記載された、併し中井博士は松村博士の使用された標本と他の一つの標本とに依て之は *D. Lotus* とは異種のものであると決定されるに至つたのである。

以上の記述に依てリウキウマメガキの如何なるものであるかが大体窺ひ得られやうと思ふが尙シナノガキとの異同に就いて一言を要する、中井博士の記載で此異同が明かであるが、更に附加すべきことは果實が熟した場合にシナノガキは黒色を帯びるのにリウキウマメガキは黄色であること、古い枝の皮膚はシナノガキでは荒く稍黒味を帯びて居るが、リウキウマメガキでは殆ど滑かで白味を帯びて居ることである、併し極古い樹では主幹の膚は裂目が出来て黒味を帯びる様になる。尙又根本氏の日本植物總覽にはシナノガキの産地として本州南部、四國、九州、琉球を挙げられて居るが日向では未だ嘗て之に該當するものを見出し得ない九州の他の地方に在るかも知れぬが解らぬ、彦山には果實の小さい柿があると聞いて居るからそれがシナノガキであるのかとも考へられるが實物を見なければ何とも謂はれぬ、或は想像を逞ふするならば松村博士がマメガキとリウキウマメガキとの異同を辨別されなかつたと同様に多少混亂して居るのではなからうか。

シナノガキは牧野博士が *D. Lotus* Linn. var. *glabra* Makino と命ぜられて植物學雜誌26卷396頁に記されて居る、併し、其記載文は單に「葉が平滑」とあるのみで詳細は解らぬ、平滑といふのはマメガキの有毛

(第三圖)



であるのに對して述べられたのである、序ながら之だけのことを記して置く。

此記事を終てから12月17日に浦武村の安井息軒先生の記念碑の在る所を訪れたらば、其直ぐ東方に非常に大きなリウキウマメガキの在るのを見出した、時間がなくて測ることは出来なかつたが從來に見た中で最大なもので其形状も甚だ良い、諸君の後日の参考の爲に附加へて置く。

(12月19日記)

## 宮崎縣産莎草科植物目錄

農 三 岡 安 文 雄

邦産莎草科植物は從來 14屬 120種ほど知られてゐるが、筆者の採集及び本校植物學教室の標本から見ると、本縣には12屬56種(内、5種不明)を産することになる。ここに本縣産莎草科植物の目錄を作り、同好の士の參考に供する。

不明の種を鑑定して下さつた京都帝國大學植物學教室の大井次三郎氏及び本校助教授遠藤茂氏に厚く感謝の意を表する。

- *Bulbostylis capillaris* Kunth. var. *capitata* Makino イトレンツキ  
大幡池 (Sept. 27, '31 S.Endo)
- Bulbostylis capillaris* Kunth. var. *trifida* Clarke イトハナビレンツキ  
下北方 (Sept. 22, '29 S.Endo)
- Carex blepharicarpa* Franch. ショウジョウスゲ  
霧島御池 (Aug. 30, '31 S.Endo)  
霧島中岳 (Aug. 5, '32 I.Hino; June 5, '32 I.Hino)
- Carex breviculmis* R. Br. subsp. *Royleana* Kuek. アラスゲ  
霧島中岳 (June 5, '32 I. Hino)
- Carex Brownii* Tuck var. *transversa* Kuek. ヤウラスゲ  
下北方 (May 7, '30 S. Endo)
- Carex brunneo* Thunb. ナキリスゲ  
双石山 (Oct. 30, '32 K. Mikagi)

- Carex cernua* Boott アゼナルコ  
下北方 (May 27, '33 H. Okayasu)
- Carex cincta* Franch. アチガウソ  
垂水 (Apr. 26, '32 S. Endo)  
下北方 (May 27, '33 H. Okayasu)
- Carex curvicolis* Franch et Sav. ナルコスグ  
尾鈴山 (May 5, '29 T. Matumoto)
- Carex gibba* Wabl. マスクサ  
下北方 (貯水池附近) (June 5, '32 Honda)  
丸島 (May 14, '33 H. Okayasu)
- Carex heterolepis* Bnuge ヤマアセスグ  
大淀河畔 (May 14, '33 H. Okayasu)
- Carex ischnostachya* Steud. ジュズスグ  
宮崎市丸島 (May 14, '33 H. Okayasu)
- Carex japonica* Thunb. ヒゴクサ  
尾鈴山 (May 5, '29 Matumoto) 丸島 (May 14, '33 H. Okayasu)
- Carex japonica* Thunb var. *aphanolepis* Kuek. エナシヒゴクサ  
宮崎市丸島 (May 14, '33 H. Okayasu)
- Carex Matsumurae* Franch. キノクニスグ  
乙島 (Nov. 26, '133 S. Endo)
- Carex macrocephale* Willd. コウボウムギ  
一ツ葉 (June 3, '33 H. Okayasu)
- Carex pumila* Thunb. コウボウシバ  
一ツ葉 (June 3, '33 H. Okayasu)
- Carex scabrifolia* Steud. シホクグ  
一ツ葉 (June 3, '33 H. Okayasu)
- Carex shimidzensis* Franch. ミヤマナルコスグ  
木花村 (May 11, '30 K. Oogami)
- Carex tristachya* Thunb. モエギスグ  
下北方(本校水田) (May 24, '32 Murata)
- Cladium Mariscus* R. Br. ヒトモトススキ  
野島 (Aug. 9, '29 I. Hino) 青島 (Aug. 9, '28 S. Endo)
- Cyperus glomeratus* L. スマガヤツリ  
下北方 (Oct. 15, '29 S. Endo; Oct. 18, '33 H. Okayasu)

- Cyperus japonicus* Makino カヤツリクサ  
 下北方 (Oct. 18, 'H. Okayasu)  
 宮崎高農農場 (Aug. 7, '31 H. Goto)
- Cyperus cernuus* L. クグガヤツリ  
 下北方 (July 22, '29 S. Endo)  
 船塚町 (June 10, '29 M. Kai)  
 高農農場 (Aug. 20, '33 H. Okayasu)
- Cyperus difformis* L. タマガヤツリ  
 石峯 (本庄) (Sept. 27, '33 H. Goto)  
 下北方 (May 27, '33 H. Okayasu)
- Cyperus globosus* All. var. *stricta* Clarke アゼガヤツリ  
 宮崎高農農場 (Aug. 7, '31 H. Goto. May 20, '33 H. Okayasu)  
 一ツ葉 (June 3, '33, H. Okayasu) Clarke
- Cyperus hakonensis* Franch et Sav. ヒナガヤツリ  
 飯盛村 (本庄) (Sept. 19, '33 H. Goto)
- Cyperus Iria* L. var. *panici formis* Clarke コゴメガヤツリ  
 宮崎高農農場 (Aug. 20, '33 H. Okayasu)
- Cyperus malaccensis* Lam. シチタウ  
 宮崎高農農場 (Aug. 20, '33 H. Okayasu)
- Cyperus nipponicus* Eranch. et Sav アラガヤツリ  
 下北方 (Sept. 15, '29, S. Endo)
- Cyperus usotundus* L. ハマスゲ  
 高農農場 (Aug. 20, '33 H. Okayasu)
- Eleocharis japonica* Miq. ハリキ  
 妻 (June 4, '33 H. Okayasu)
- Eleocharis plantaginea* R. Br. クログワキ  
 下北方湿地
- Fimbristylis annua* Roem. et Schult. テンツキ  
 下北方 (Oct. 18, '33 H. Okayasu)
- Fimbristylis complanata* Link var. *Kraussiana* Clarke ノテンツキ  
 霧島中岳 (Oct. 31, '31 S. Endo)  
 下北方 (Oct. 18, '33 H. Okayasu)
- Fimbristylis miliacea* Vahl. ヒデリコ  
 下北方 (Sept. 22, '29 S. Endo; Oct. 18, '33 H. Okayasu)
- Fimbristylis Sieboldi* Miq. イソヤマテンツキ

- 一ツ葉 (June 3, '33 H. Okayasu)  
*Fimbristylis sub-bispicata* Nees et Mey.  
 下北方 (Sept. 22, '29 S. Endo, July 23, '30 K. Oogami  
 Oct. 18, '33 H. Okayasu)  
 御池 (霧島山) (Aug. 30, '31 S. Endo)  
*Kyllingia brevifolia* Rottb. ヒメクグ  
 下北方 (July 22, '29 S. Endo)  
 飯盛村 (本庄 Sept. 19, '33 H. Goto)  
 西丸山町 (June 10, '33 H. Okayasu)  
*Lipocarpha microcephala* Kunth ヒンジガヤツリ  
 下北方濕地  
 高農農場 (Aug. 20, '33 H. Okayasu)  
*Mariscus Sieberianus* Nees. var. *subcomposita* Clarke クグ  
 下北方 (Sept. 22, '29 S. Endo)  
 大淀河畔 (May. 27, '33 H. Okayasu)  
*Rhynchospora rubra* Makino イガクサ  
 下北方 (Oct. 30, '33 H. Okayasu)  
*Scirpus cyperiaus* Kunth. var. *concolor* Makino アブラガヤ  
 双石山 (Sept. 17, '33 H. Okayasu)  
*Scirpus erectus* Poir. ホタルキ  
 大淀川 (Aug. 31, '33 H. Okayasu)  
*Scirpus lacustris* L. var. *Tabernaemontani* Trautv. フトキ  
 大淀河畔 (May 14, '33 H. Okayasu)  
*Scirpus mucronatus* L. カンガレキ  
 妻 (Aug. 13, '33 S. Endo)  
*Scirpus triquet* L. サンカクキ  
 大淀川 (May. 14, '33 H. Okayasu)  
*Scirpus ternatanus* Reinw. オホアブラガヤ  
 日向ライン (May 7, '33 S. Endo)  
*Scleria hebecarpa* Nees. シンジユガヤ  
 杉安 (Aug. 18, '29 I. Hino)  
 住吉村 (Aug. 10, '31 S. Endo)  
*Scleria tessellata* Willd. コシンドユガヤ  
 北下方濕地

# 宮崎菌蕈類目録

農 三 野 口 等

採集しました地域は甚だ狭少であります。先づ最初に採集に行きましたのが五月七日に青井岳に参りました。茲で採集しました数は少くとも五十種以上ありました。此の中硬質菌が比較的多くありました。時期が良かったためか青井岳では多数の菌類を採集しました。

次に六月十一日、高鍋附近に採集に行きました。此の時は菌類のみが目的でなかつたために比較的目につくものが少なかつたのであります。

八月二十七日、行藤山に行きました。併し青井岳程には豊富ではなかつたやうに感じます。

此の外採集地として舉ると、宮崎市附近と宮崎高等農林學校構内とがあります。

次に掲げるものは、以上の數ヶ所で採集したものの中で種名の判明したもののだけであります。

## I 青井岳にて採集

- 1、アミスギタケ *Polyporus arcularius* Fr.
- 2、アラゲカハキタケ *Panus rudis* Fr.
- 3、アングロタケ *Polyporus picipes* Fr.
- 4、エゴノキタケ *Lenzites styraciina* (H. et S.) Yasuda
- 5、ハリヒラタケ *Hydnum septentrionale* Fr.
- 6、ヒロタケ *Polystictus sanguineus* (L.) Fr.
- 7、ホコリタケ *Lycoperdon gemmatum* Batsch
- 8、カヒガラタケ *Lenzites betulina* (L.) Fr.
- 9、カレバタケ *Marasmius erythropus* Fr.
- 10、カハキタケ *Panus flabelliformis* (Sc.) Quelet.
- 11、カハラタケ *Polystictus versicolor* (L.) Fr.
- 12、カハタケ *Hydnum aspratium* Berkley
- 13、ケカハラタケ *Polystictus hirsutus* Schweinitz
- 14、キコブタケ *Fomes ighiarius* Fr.
- 15、キクラゲ *Auricularia auricula-judae* (L.) Schroter
- 16、キテングタケ *Amanita muscaria* (L.) Fr.

- 17、コブキササルノコンカケ *Fomes applanatus* Pers.
- 18、クリイロカハラタケ *Polystictus zonatus* Fr.
- 19、マヒタケ *Polyporus frondosus* Fr.
- 20、マスタケ *Polyporus sulphureus* (Bull.) Fr.
- 21、ミダレタケ *Daedalea quercina* (L.) Fr.
- 22、モエギタケ *Stropharia aeruginosa* (Curt.) Fr.
- 23、オチバタケ *Marasmius androsaceus* L.
- 24、ツガノサルノコンカケ *Fomes pinicola* (Swartz) Fr.
- 25、ツリガネタケ *Fomes formentarius* (L.) Fr.
- 26、ウチワタケ *Polystictus flabelliformis* Klotzsch.
- 27、ヤマブシタケ *Hydnum erynaceus* (Bull.) Fr.

#### ii 高鍋附近にて採集

- 1、アミタケ *Boletus bovenus* (L.) Fr.
- 2、ハナキクチ *Boletus elegans* (Schum.) Fr.
- 3、イロガワリ *Boletus badius* Fr.
- 4、カラカサタケ *Lepiota procera* (Scop.) Fr.
- 5、コベニタケ *Russula fragilis* (Pers.) Fr.
- 6、オチバタケ *Marasmius androsaceus* L.

#### iii 行徳山にて採集

- 1、ハリガネオチバタケ *Marasmius siccus* Sch.
- 2、ハリガネオチバタケモドキ *Marasmius* sp.
- 3、ヒイロタケ *Polystictus sanguineus* Fr.
- 4、マスタケ *Polyporus sulphureus* (Bull.) Fr.
- 5、ナミダタケ *Merlius lacrymans* Fr.
- 6、ニガクリタケ *Hypholoma fascicular* (Hudson) Fr.
- 7、オチバタケ *Marasmius androsaceus* L.
- 8、スエヒロタケ *Schuyzophyllum commune* Fr.
- 9、ウチワタケ *Polystictus flabelliformis* Klotzsch

#### iv 本校並に其附近にて採集

- 1、ヒイロタケ *Polystictus sanguineus* (L.) Fr.
- 2、ヒメホコリタケ *Lycoperdon Wrightii* B. et C.

- 3、マグソタケ *Panaeolus fimicola* Fr.
- 4、マグソヒトヨタケ *Coprinus sterquilinus* Fr.
- 5、ムラサキホコリカビ *Stemonites fusca* Roth.
- 6、ムラサキシメジ *Tricholoma nudum* (Bull.) Fr.
- 7、キツネノエフデ *Mitinus boninensis* E. Fisch.
- 8、キツネノタイマツ *Phallus rugulosus* Fisher.
- 9、スエヒロタケ *Schyzophyllum commune* Fr.
- 10、サイギョウガサ *Panaeolus retirugis* Fr.
- 11、ツネノチヤダイゴケ *Crucibulum vulgare* Tul.
- 12、ツチグリ *Geaster hygrometricus* Pers.

#### V 宮崎附近にて採集

- 1、イロガワリ *Boletus badius* Fr.
- 2、キクラゲ *Auricularia auricula-judae* (L.) Schroter
- 3、コベニタケ *Pussula fragilis* (Pers.) Fr.
- 4、モリハラタケ *Psaliota sylvatica* Fr.
- 5、ムラサキホコリカビ *Stemonites fusca* Roth.
- 6、ツルタケ *Amanitopsis vaginata* (Bull.) Roze

次に科別に採集品を排列いたしますと次の通りになります。

#### I マツタケ科

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1 アラゲカハキタケ     | 2 ハリガネオチバタケ |
| 3 ハリガネオチバタケモドキ | 4 カラカサタケ    |
| 5 カレハダケ        | 6 カハキタケ     |
| 7 コベニタケ        | 8 キテングタケ    |
| 9 マグサタケ        | 10 マグソヒトヨタケ |
| 11 モエギタケ       | 12 モリハラタケ   |
| 13 ムラサキシメジ     | 14 ニガクリタケ   |
| 15 オチバタケ       | 16 スエヒロタケ   |
| 17 サイギョウガサ     | 18 ツルタケ     |

#### II サルノコシカケ科

- |          |          |
|----------|----------|
| 1 アミタケ   | 2 アミスギタケ |
| 3 アシグロタケ | 4 エゴノキタケ |
| 5 ヒイロタケ  | 6 ハナイグチ  |

- |    |           |    |            |
|----|-----------|----|------------|
| 7  | イロガワリ     | 9  | カヒガラタケ     |
| 9  | カハラタケ     | 10 | ケカハラタケ     |
| 11 | キコブタケ     | 12 | コフキサルノコシカケ |
| 13 | クリイロカハラタケ | 14 | マヒタケ       |
| 15 | マスタケ      | 16 | ミダレタケ      |
| 17 | ナミダタケ     | 18 | ツガノサルノコシカケ |
| 19 | ツリガネタケ    | 20 | ウチワタケ      |

### III ハリタケ科

- |   |        |   |      |
|---|--------|---|------|
| 1 | ハリヒラタケ | 2 | カウタケ |
| 3 | ヤマアシタケ |   |      |

### IV ホコリタケ科

- |   |         |   |       |
|---|---------|---|-------|
| 1 | ヒメホコリタケ | 2 | ホコリタケ |
| 3 | ツチグリ    |   |       |

### V スツボシタケ科

- |   |         |   |          |
|---|---------|---|----------|
| 1 | キツネノエフデ | 2 | キツネノタイマツ |
|---|---------|---|----------|

### VI キクラゲ科

- 1 キクラゲ

### VII チヤダイゴケ科

- 1 ツネノチヤダイゴケ

### VIII ムラサキホコリカビ科

- 1 ムラサキホコリカビ

## 本庄町附近植物目録

### 後 藤 弘

#### Polypodiaceae うらほし科

カウザキンダ

本庄町 石 峰

ノコギリシダ

同

マメヅタ

同

ゲヂゲヂシダ

同 平原山

ベニシダ

同

ハンゴシダ	本庄町平原山
イヌシダ	同
ホラシノブ	同
タチシノブ	同
オニヤブソテツ	同 石 峰
ワラビ	同 平原山
キノモトサウ	同 石 峰
アマクサシダ	同
コモチシダ	同 平原山
Schizacaceae ふさしだ科	
カニクサ	本庄町平原山
Lycopodiaceae ひかけのかづら科	
タフゲシバ	本庄町平原山
ヒカゲノカヅラ	同
Selaginellaceae いはひば科	
イハヒバ	本庄町 石 峰
カタヒバ	同
Piperaceae こせう科	
フウタウカヅラ	本庄町 石 峰
Fagaceae ぶな科	
クリ	本庄町平原山
マテバシヒ	同
イチキガシ	同
Snatalaceae びやくだん科	
カナビキサウ	本庄町平原山
Polygonaceae たで科	
イヌタデ	本庄町飯盛村
シロイヌタデ	同
Amarantaceae ひゆ科	
イヌビユ	本庄町飯盛村
Caryophyllaceae なでしこ科	
ツメクサ	本庄町飯盛村
Menispermaceae つづらふち科	
ハスノハカヅラ	本庄町 石 峰

Rosaceae	いばら科	
	ツクシイバラ	本庄町
Legminosae	まめ科	
	コマツナギ	本庄町平原山
	ネコハギ	同
	ヤハズサウ	同
	ナツフヂ	同
Oxalidaceae	かたばみ科	
	ハナカタバミ	本庄町飯盛村
Euphorbiaceae	たかとうだい科	
	ニシキサウ	本庄町飯盛村
	コミカンサウ	同
Vitaceae	ぶどう科	
	ナツツタ	本庄町平原山
Guttiferae	おとぎりさう科	
	オトギリサウ	本庄町平原山
	ヒメオトギリサウ	同
Violaceae	すみれ科	
	コスミレ	本庄町石峰
Lythraceae	みそはぎ科	
	ミソハギ	本庄町
Cornaceae	みづき科	
	ハナイカタ	本庄町
Piroraceae	いちやくさう科	
	イチヤクサウ	本庄町平原山
Symplocaceae	はひのき科	
	サハフタギ	本庄町平原山
Borraginaceae	むらさき科	
	ハナイバナ	本庄町飯盛村
Labiatae	しんけい科	
	ヂゴクノカマノフタ	本庄町飯盛村
	ナツノタムラサウ	同 平原山
Scrophulariaceae	ごまのはぐさ科	
	ヒメトラノヲ	本庄町平原山

トラノヲ	本庄町平原山
Orobanchaceae はまうつほ科	
ナンバンギセル	本庄町平原山
Acanthaceae きつねのまご科	
キツネノマゴ	本庄町飯盛村
Valerianaceae をみなへし科	
ラミナヘシ	本庄町平原山
ヲトコヘシ	同
Compositae きく科	
ヒメガンクビサウ	本庄町平原山
ガンクビサウ	同
ヒヨドリバナ	同
Gramineae くわほん科	
トダンバ	本庄町平原山
ササクサ	同
スズメノヒエ	同 平原山
	同 飯盛村
イタチガヤ	同 平原山
チガヤ	本 庄 町
Cyperaceae かやつりぐさ科	
タマガヤツリ	本庄町石 峰
ヒメガヤツリ	同 飯盛村
ヒメクグ	同
Liliaceae ゆり科	
シヤウジヨーバカマ	本庄町平原山
ヤブラン	同
	同 石 峰
ノギラン	同 平原山
ジヤノヒゲ	同
Orchidaceae らん科	
コ克蘭	本庄町平原山
	同 石 峰
ネヂバナ	本 庄 町

# 双石山植物目録

幾竹正實  
徳村初

## 菊科

ヨメナ	ヤマシロギク	ヤクシサウ
ヤマアザミ	ヤブタバコ	センボンヤリ
ツブキ	ヌマダイコン	カウモリサウ
ツクシカウモリサウ	キツカウハグマ	アキノキリンサウ
モミヂカウモリ	カウヤバハキ	

## 桔梗科

ツリガネニンジン	ツルニンジン
----------	--------

## 敗醬科

オトコヘシ

## 忍冬科

ヘクソカツラ	シロバナイナモリ	サツマイナモリ
アリドホシ		

## 苦苣苔科

イハタバコ

## 列當科

ナンバンギセル

## 馬鞭草科

ハマクサギ	ムラサキシキブ	オホムラサキ
-------	---------	--------

## 夾竹桃科

テイカカツラ

## 龍膽科

リンダウ	センブリ
------	------

## 安息香科

ハクサンボク

## 紫金牛科

イズセンリヤウ	ウルカウジ	タイミンタチバナ
---------	-------	----------

## 石南科

アセビ	ミツバツツジ	ネチキ
-----	--------	-----

イチヤクサウ	鹿蹄草科	
	山茶黄科	
アラキ	ハナイカダ	
	繖形科	
ノダケ	ヤマニンジン	
	五加科	
ハリギリ	キヅタ	ヤツデ
タラノキ	フユヅタ	
	胡頹子科	
ナハシログミ	ナツグミ	
	山茶科	
サザンクワ	ヒサカキ	サカキ
	膽八樹科	
コバンモチノキ		
	葡科	
エビヅル	ノブダウ	ナツヅタ
	鼠李科	
ネコノチチ		
	清風藤科	
ヤマビハ		
	槭樹科	
イタヤカヘデ		
	衛矛科	
マサキ	ニシキギ	ツルウメモドキ
マユミ		
	瑞香科	
イヌガンピ		
	冬青科	
アヲハダ	タラエフ	
	芸香科	
マツカゼサウ	ミヤマシキミ	サンセウ
	酢漿草科	
ミヤマカダバミ	カタバミ	

荳 科

マキエハギ	ヤマハギ	メドハギ
マルバハギ	ノササゲ	ヌスビトハギ
ヤブハギ	コマツナギ	ナツフジ
タンキリマメ		

薔 薇 科

ヤマザクラ	ナハシロイチゴ	フユイチゴ
ヘビイチゴ	ツチグリ	ミツバツチグリ
キンミズヒキ		

虎 耳 草 科

ダイモンジサウ	マルバウツギ	バイクワアマチヤ
ガクウツギ		

景 天 科

キリンサウ

十 字 花 科

ナヅナ

樟 科

クスノキ	ニクケイ	ヤブニクケイ
カナクギノキ		

木 通 科

アケビ	ミツバアケビ	トキハアケビ
-----	--------	--------

蓼 科

イヌタデ	ミヅヒキグサ
------	--------

馬 兜 鈴 科

カンアフヒ

蛇 菰 科

ツチトリモチ

蕁 麻 科

ヤブマテ	キミヅ	ハドノキ
------	-----	------

桑 科

イヌビハ	ホソバイヌビハ	イタビカヅラ
------	---------	--------

榆 科

ムクノキ	エノキ
------	-----

山 毛 櫟 科

ウラジロガシ	クリ	シヒ
マテバシヒ	アヲガシ	
	胡椒科	
フウタウカツラ		
	蘭科	
キエビネ	キリシマエビネ	セキコク
フウラン	ナゴラン	ネヂバナ
	薯蕷科	
ハナメウガ	アヲノクマタケラン	
	薯蕷科	
ヤマノイモ	オニドコロ	
	百合科	
オニユリ	ナルコユリ	ギバウシ
イハギバウシ	キバナノホトトギス	ソクシンラン
	天南星科	
ムサシアブミ	ウラシマサウ	テンナンセウ
	禾本科	
チヂミザサ	ササクサ	ウンノケモドキ
	松杉科	
アカマツ	クロマツ	スギ
	卷柏科	
イハヒバ	カタヒバ	
	石松科	
ヒカゲノカツラ		
	瓶爾小草科	
フユノハナワラビ		
	観音座蓮科	
リウビンタイ		
	裏白科	
コシダ		
	水龍骨科	
スヂヒトツバ	ヒトツバ	ノキシノブ
ミツデウラボシ	クリハラン	マメヅタ
シシラン	ワラビ	ホノモトサウ

オホバノ半ノモトサウ	アマクサシダ	キジノヲ
タチシノブ	イハガネサウ	コモチシダ
ヘラシダ	ホラシノブ	フモトシダ
ヤブソテツ	半ノデ	ホソバノカナワラビ
ホシダ	オホミツデ	ゲジゲジシダ
ペニシダ	イタチシダ	オリヅルシダ
イワヒトデ	ホウビンダ	ホングウシダ
ヒノキシダ	ハコネシダ	ノコギリシダ
	苔 葱 科	
ツルホラゴケ		

## 宮崎市附近の水生植物目録

### 猿 渡 純 義

#### A. 下 北 方 池

	ひるむしろ科	
ヒルムシロ	コバノヒルムシロ	エビモ
ササバモ	ミヅヒキモ	イトモ
	ひ し 科	
ヒシ	ヒメビン	
	ま つ も 科	
マツモ		
	とちかがみ科	
クロモ		
	ごまのほぐさ科	
キクモ		
	あかばな科	
ミヅユキノシタ		

#### B. 蓮 池

	ひ し 科
ヒメビン	



ミヅハコベ

みづはこべ科

ミヅハコベ

アワゴケ

## 青島及び富高附近の海藻目録

農 三 田 中 一

## I. 紅 藻 類

Grateloupiaceae むかでのり科

Grateloupia divaricata Okam. var. intricata Sur. カタノリ 青島

Gloiosiphoniaceae いとふのり科

Gloiosiphonia capillaris (Huds.) Carm. イトフノリ 小倉ヶ濱(富高)

Ceramiaceae. いざす科

Ceranium rubrum J. Ag. イギス 青島

Microcladie corallinae (Mart) Okam. ニクサエダ 同

Ceranium tenerrimum (Mart) Okam. ケイギス 同

Campylaephora Hypneoides J. Ag. エゴノリ 同

Rhodomelaceae. ふじまつも科

Dasya Scoparia Harv. グジヤ(ヒゲモグサ) 青島

Laurencia obtusa Lamour. シオデソゾ 同

Laurencia paniculata J. Ag. オホソゾ 同

Herposiphonia fissidentoides (Holm) Okam. 同

Sphaerococaceae おごのり科

Gracilaria confervoies Grew. オゴノリ 青島

Rhodophyllidaceae とさかのり科

Chondrococcus Hornemanni (Ment) Schmitz. ホソバナノナミノハナ

同

Gigartinaceae すぎのり科

Ahnfeltia concima J. Ag. サイミ 伊勢ヶ濱(富高)青島

Calliophyllis crispata Okam. ヒロバノトサカノリ 小倉ヶ濱(富高)

Gymnogongrus flabelliformis Harb. キクサイミ 青島

Gelidiaceae てんぐさ科

<i>Yatabella hirsuta</i> Okam.	ヤタベグサ	青島
Chaetangiaceae	ふさのり科	
<i>Garaxaura obtusata</i> Lamx.	フクロガラガラ	同
<i>Scinaia furcellata</i> Biv.	フサノリ	同
Delesseriaceae	このはのり科	
<i>Nitophyllum uncinatum</i> (Turn.) J. Ag.	カギウスバノリ	同

## II. 褐藻類

Fucaceae	ひばまた科	
<i>Sargassum Hornern</i> Ag.	アカモク 伊勢ヶ濱、小倉ヶ濱(富高)	
<i>Sargassum Rinoggoldianum</i> Harv.	オホバモク	一ツ葉
<i>Sargassum serratifolium</i> Ag.	ノコギリモク	青島
<i>Sargassum sagaminum</i> Yendo	ネヂレモク	同
<i>Sargassum tortile</i> Ag.	ヨレモク	一ツ葉
<i>Sargassum Thunberii</i> J. Ag.	ウミトラノヲ	青島
<i>Ishigei Okmurai</i> Yendo	イシゲ	小倉ヶ濱(富高)
Laminariaceae	こんぶ科	
<i>Eisenia arboria</i> Aresch var. <i>bicyclis</i> Yendo	アラメ	一ツ葉
Eotocarpaceae	そとみ科	
<i>Leathesia difformis</i> (L.) Aresh.	ネバリモ	青島
Hydroelathraceae		
<i>Hydroclathrus caucellatus</i> Bary	カゴメノリ	青島

## III. 緑藻類

Cladophoraceae	しほぐさ科	
<i>Chaetomorpha crassa</i> (Ag.) Kutz.	ホソジユズモ	小倉ヶ濱(富高)
<i>Cladophora wrightiana</i> Harv.	チヤシホグサ	青島
Codiaceae	みる科	
<i>Codium latum</i> Sur.	ヒラミル	青島、小倉ヶ濱(富高)
<i>Codium macronatum</i> J. Ag. var. <i>californicum</i> J. Ag.	エル	青島
Ulvaceae	あをさ科	
<i>Enteromorpha compressa</i> Grev.	アラノリ	青島
<i>Ulva lactuca</i> Le Jol.	アラサ	一ツ葉

## 本校農場雑草目録

田 中 一  
 徳 村 初 男  
 富 岡 芳 雄  
 植 木 彰

## ひゆ科 (Amarantaceae)

*Amarantus Blitum* L. var. *oleraceus* Hook. イヌビユ

## さといも科 (Araceae)

*Pinellia ternata* Breit. カラスビシヤク

## きつねのまご科 (Acanthaceae)

*Justicia procumbens* L. キツネノマゴ

## すみせん科 (Amaryllidaceae)

*Lycoris radiata* Herb. ヒガンバナ

## つるな科 (Aizoaceae)

*Mollugo stricta* L. ザクロサウ

## むらさき科 (Boraginaceae)

*Bothriospermum ternellum* Franch. et Sav. var. *asuerugoides*  
 Maxim. ハナイバナ

## きく科 (Compositae)

*Taraxacum albibum* Dahlst. タンポポ

*Lactuca debilis* Benth. ジシバリ

*Aster Laulureanus* Franch. ヨメナ

*Centipeda Minima* O. Kuntze トキンサウ

*Artemisia vulgaris* L. var. *indica* Maxim. ヨモギ

*Lampsana humilis* Mak. ヤブタビラコ

*Gnaphalium japonicum* L. チチコグサ

*Gnaphalium multiceps* Wall. ハハコグサ

*Inula britannica* L. var. *japonica* Franch. et Sav. ナグルマ

## あさがほ科 (Convolvulaceae)

*Calystegia subvolubilis* Don. ヒルガホ

## なたね科 (Cruciferae)

*Nusturtium sublyratum* Franch et Sav. イヌガラシ

## つゆくさ科 (Commelinaceae)

Commelina communis L. ツユクサ

## せきちく科 (Caryophyllaceae)

Stellaria media Cyr. ハコベ

## かやつりぐさ科 (Cyperaceae)

Cyperus Iria L. コゴメカヤツリ

Fimbristylis ferruginea, Vahl. シマテンツキ

Fimbristylis verrucifera Makino アラテンツキ

Cyperus compressus L. クグカヤツリ

Kyllingia brevifolia Rottb. ヒメクグ

Cyperus globosus All. var. stricta Clarke. アゼカヤツリ

## とくさ科 (Equisetaceae)

Equisetum arvense L. スギナ

## にしきさう科 (Euphorbiaceae)

Phyllanthus nirinaria L. コミカンサウ

Euphorbia humifusa Willd.

var. gennina Nakai ニシキサウエノキグサ

Acalypha australis L. アミガササウ

## くわほん科 (Gramineae)

Arthraxon cryptatherus var. ciliaris Koidz. コブナグサ

Syntherisma Ischaemum Nash. アキノメヒジハ

Eleusine niwahokori Honda ニハホコリ

Syntherisma sanguinalis var. ciliaris Honda メヒジハ

Arundinella hirta var. ciliata Kodz. トダシバ

Imperata typia var. Koenigii Honda チガヤ

Ischaemum Sieboldi Miq. カモノハシ

## おとぎりさう科 (Guttiferae)

Hypericum japonicum Thunb. ヒメオトギリ

## ふうろうさう科 (Geraniaceae)

Geranium nepalense Sweet. フウロウサウ

## しんけい科 (Labiatae)

Agastache decumbens Thunb. キランサウ

Centotheca lutescens Stuntz. トウバナ

Clinopodium chinense O. Kuntze クルマバナ

- Plectranthus inflexus* Vahl. ヤマハクカ  
まめ科 (Leguminosae)
- Microlespedeza striata* Mak. ヤハズサウ
- Lotus corniculatus* L. var. *japonica* Regel. ミヤコグサ
- Lespedeza junsea* Pers. var. *sericea* Maxim. メドハギ
- Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. コマツナギ  
ゆり科 (Liliaceae)
- Scilla Thunbergii* Miyabe et Kudo ツルボ
- Ophiopogon japonica* Ker. ジャノヒゲ  
かたばみ科 (Oxalidaceae)
- Oxalis corniculata* L. カタバミ  
はなやすり科 (Oyhioglosaceae)
- Ophioglossum nipponicum* Miyabe et Kudo ハナヤスリ  
おほぼこ科 (Plantaginaceae)
- Plantago major* L. var. *asiatica* Decne. オホバコ  
すべりひゆ科 (Portulacaceae)
- Portulaca oleanacea* L. スベリヒユ  
たて科 (Polygonaceae)
- Polygonum senticosum* Franch et Kudo トゲソバ
- Polygonum hastato-sagittatum* Makino ナガバノウナギツカミ
- Polygonum dolichopodum* Ohki. サクラタデ
- Polygonum Blumei* Meisn.  
さくらさう科 (Primulaceae)
- Lysimachia japonica* Thunb. コナスビ  
ばら科 (Rosaceae)
- Sanguisorba officinalis* L. ワレモカウ
- Agrimonia japonica* Koidu. キンミヅヒキ  
うまのあしがた科 (Ranunculaceae)
- Ranunculus pleniflorus* Makino キンボウゲ  
あかね科 (Rubiaceae)
- Paederia chinensis* Hance. ヘクソカヅラ  
いわひば科 (Selaginellaceae)
- Selaginella Kraussiana* A. Br. クラマコゲ  
ごまのはぐさ科 (Scrophulariaceae)

*Torenia crustacea* Cham et Schlecht. ウリグサ

びくだみ科 (Saururaceae)

*Houttuynia cordata* Thunb. ドクダミ

せり科 (Umbelliferae)

*Lampsana humilis* Mak. チドメグサ

すみれ科 (Violaceae)

*Viola mandshurica* var. *albescens* Nakai スミレ

*Viola grypoceras* A. Gray. タチツボスミレ

## 一ツ葉附近植物目録

新	名	正	憲
七	田	安	治
鈴	木	政	市
財	部	利	田

### Compositae (菊科)

1. *Erigeron stoechadosmum* Hance フジバカス
2. *Lactuca repens* Benth et Hook ハマニガナ
3. *Solidago virgaurea* Linne アキノキリンサウ
4. *Siegesbeckia pubescens* Makino メナモミ
5. *Wedelia prostrata* Hemsl ハマグルマ

### Caprifoliaceae (忍冬科)

1. *Lonicera japonica* Thunb. スヒカヅラ
2. *Viburnum japonicum* Spreng. ハクサンボク

### Rubiaceae (アカネ科)

1. *Gardenia florida* var. *grandiflora* Franch et Sav. クチナシ

### Solanaceae (茄科)

1. *Mirabilis jalapa* Linne オシロイバナ
2. *Physalis Alerekengi* L. ホホヅキ

### Verbenaceae (馬鞭草科)

1. *Vitex trifolia* Linne var. *orata* Makino ハマゴウ

## Elaeagnaceae (胡頹子科)

1. *Elaeagnus pungens* Thub. ナハシログミ

## Violaceae (薫衣草科)

1. *Viola Handshurica* W. Beck. スミレ
2. *Viola grypoceras* A. Gray タチツボスミレ

## Aquifoliaceae (冬青科)

1. *Ilex serrata* Thunb. var. *Sieboldi* Loeo. ウメモドキ

## Leguminosae (荳科)

1. *Cassia minmosoides* L. var. *nomame* Makino カハラケツメイ
2. *Crofularia sessiliflora eriantha* Makino タヌキマメ
3. *Desmodium japonicum* Miq. ススビトハギ
4. *Desmodium laburnifolium* DC. ミソナホシ
5. *Indegofera pseudo-tunctoria* Matsum. コマツナギ
6. *Lespedeza sericea* Miq. メドハギ
7. *Lathyrus maritimus* Bigel. ハマエンドウ
8. *Lespedeza cyrtobotrya* Miq. マルバハギ
9. *Micro espe striato* Makino ヤハズサウ

## Pittosporaceae (海桐花科)

1. *Pitteosporum Tobira* Ait. トベラ

## Rosaceae (バラ科)

1. *Ageimonia Eupatoria* L. var. *pirosa* Makino キンミズヒキ
2. *Potentilla chinensis* Ser. カハラサイコ

## Ericaceae (しやくなけ科)

1. *Vaccinium Bracteatum* Thunb. シヤシヤンボ

## Chenopodiaceae (アカザ科)

1. *Atriplex tatarica* L. ハマアカザ

## Santalaceae (檀香科)

1. *Thesium clinense* Turcz. カナビキサウ

## Liliaceae (百合科)

1. *Ophiopogon Japonicus* Ker. リウノヒゲ

## Cyperaceae (莎草科)

1. *Cyperus malaccensis* Lam. シチトウキ
2. *Cyperus compressus* Linne クグカヤツリ
3. *Bulbostylis barbata* Kunth. ハタガヤ

4. *Fimbristylis squarrosa* Vahl. アゼテンツキ
5. *Fimbristylis Wightiana* Nees シホカゼテンツキ
6. *Carex macrocephala* Willd. コホボウムギ

## Gramineae (禾本科)

1. *Arundinella anomara* Steud. トダシバ
2. *Imperata arundinacea* Cyr. var. *Koenigii* Hack. チガヤ
3. *Imperata antheperoides* Miq. ケカモノハシ
4. *Lopheterum gracile* Brong. var. *elatum* Hack. ササクサ
5. *Osterdamia macrostachya* Honda オニシバ
6. *Echinochla crusgalli* L. subsp. *submutica* Honda  
var. *typica* Honda ノビエ
7. *Phragmites longivalis* Steud. ヨシ
8. *Ischaemum crassipes* Nanai カモノハシ

## Polypodiaceae. (水龍骨科)

1. *Polypodium lineare* Thunb. ノキシノブ

註 一ツ葉は宮崎市東 海岸に位し、もこ蔵村の一 部あつた

## 下北山麓植物目録

野	中	武	義
岡	田	道	夫
岡	安	文	雄
猿	渡	純	義

## 菊 科

- メナモミ (*Siegesbeckia pubescens* Makino.)  
 ガンクビサウ (*Carpesium divaricatum* Sieb. et Zucc.)  
 アレチノギク (*Erigeron linifolius* Willd.)

## 唇 形 科

- アキノタムラサウ (*Salvia chinensis* Benth.)

## ま め 科

- タンキリマメ (*Rhynchosia Volubilis* Lour.)  
 ツブヂ (*Millettia japonica* A. Gray.)

- ハギ (*Lespedeza bicor* Turcz. var. *japonica* Nakai)  
 ミソナホシ (*Dolbergia loburnifium* DC.)  
 ススビトハギ (*Desmodium podocarpum*, Dc. var. *japonica* Maxim.)  
     きつねのまご科  
 キツネノマゴ (*Justicia procumbens* L.)  
 ハグロサウ (*Dicliptera chinensis* Nees.)  
     いばら科  
 ケンミツヒキ (*Agrimonia Eupatoria* L.)  
 フユイチゴ (*Rubus Buergeri* Miq.)  
     ゆきのした科  
 ウツギ (*Deutzia crenata* Makino.)  
     ひゆ科  
 キノコヅチ (*Achyranthea bidcutata* Blume.)  
     らん科  
 ヤブラン (*Liriope minor* Makino)  
     ひがんな科  
 ヒガンバナ (*Lycris rodriata* Herb.)  
     ゆり科  
 サルトリイバラ (*Smilax China* L.)  
     かやつりぐさ科  
 スマガヤツリ (*Cyperusglomeratus* L.)  
 コゴメガヤツリ (*Cyperus iris* L. var. *paniciformis* elarke)  
 タマガヤツリ (*Carex difformis* L.)  
 ヤマキ (*Fimbristylis sub-bispicata* Nees et Mey.)  
 シマテンツキ (*Fimbristylis ferruginea* Tahl.)  
 アホテンツキ (*Fimbristylis verrucifera* Makino)  
 ヒメクグ (*Lipcarpha microcephala* Kunth.)  
 クグ (*Mariscus Sieberianus* Nees. var. *subcomposita* Clarke)  
     くわほん科  
 ノビエ (*Echinochloa crusgalli* sabs. *submutica* Honnda,  
     var. *typica* Honda)  
 ネズミノテ (*Sporohorus elongatus* R. Br.)  
 イタチガヤ (*Pogonatherum crinitum* Tim.)  
 ムラサキエノコロ (*Chaetochloa viridis* Scrib.)



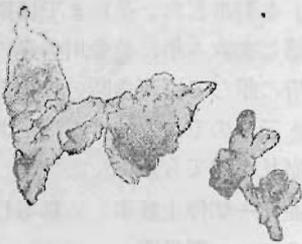
## 淡水藻『かはたけ』に就て

農 二 加 峯 實

緒 論

凡そ淡水産の藻類は、藍藻（分裂藻）、鞭毛藻、鞭藻、珪藻、接合藻、緑藻、車軸藻、褐藻、紅藻の各部門に屬するものが含まれて居る。最もよく吾等の身邊に見る淡水藻としては、さやみぎろ、ブルボキテー、ふしなしみぎろ、ねだしぐさ、ふうせんも、すみれも、かはもづく、じゆすも、あをみぎろ、ふしなしみぎろ、よしめも、ほしみぎろ、つゞみも等あり。又天然記念物として指定された淡水藻に毬藻、するぜんじのり、ちすじのりの三種がある。之等のものとならんで近來有名となつたものに壽泉苔の原藻かはたけがある。するぜんじのりによくにたもので同じく藍藻に屬し、小川に生えるもので産業上重要なるものである。

「かはたけ」より製造する壽泉苔の沿革



「かはたけ」

筑前の國朝倉郡金川村屋永に石淵と云ふ泌沸がある。流れて東川となつてゐる、此の流れに古來から生ひ立つて居た青紫色の苔がある。當時の里人は是を「かえるこも」と稱して今日の如く食用とする事を知らず灌漑用の水路に澤山群生するのは流

水の邪魔物とする位であつた。寶曆十三年三月（約百四十年前）七代の祖遠藤幸右衛門氏が、所有の土地巡見の際此東川に群生してゐる此の水藻を發見して試食せしに、香味頗る雅淡なるを知り、大いに喜び保存及び製法に就いて研究を凝らした、これが抑も川苔が食用に供せられた濫觴である。然れども長年月のその研究も効を奏せずして一時中絶の止むなきに至りしも、其の珍味を如何にもして世に廣く奨めたまふ念禁する能はず、安永七年七月再び堅き決心の下に研究に着手せしも遂に得る所なくして長逝せり。其の子喜三右衛門氏父の遺志を繼ぎて其研究に着手し秋月藩主の聲援の下に苦心の結果遂に寛政五年一月原藻發見後より約三十年後一種の乾製法を會得し、大に喜びて國主秋月藩主に獻ぜしに殊

の外嘉賞せられて壽き苔と命名せられ後「泉」の字を加ふべき命ありて「壽泉苔」と改稱す、尙ほ生産地の川名をも黄金川と國主より賜名せられ、次の一詠を興へられた、現村金川と稱するは實に此に起因す。

こがね川清瀬に生る水苔は

千歳をかけて猶しけるらむ

寛政八年十二月には秋月藩内の川苔の産する川筋に郡役所より制札を建て、遠藤家外の者の採取を禁じた。

蜀山人の一語一言補遺の中に「紫金苔(ことぶきのり)右黒田甲斐守殿封内筑前より出る細川の水善寺海苔の如し、味水善寺より滑にして美なり、水善寺は池より出る、紫金苔は山水にて作る。近頃水善寺おとろへておほくは紫金苔を買ふて水善寺のりとなす。ことぶきのりは價廉なり水善寺は價貴しといふ」といふ記事がある。紫金苔とは壽泉苔の別名であつて、既にその頃壽泉苔は隆盛に向ひつつあつたことがうかがわれる。大阪天満市の鯉屋半兵衛と壽泉苔一枚に付銀六匁で買賣約定をなし、販路の擴張を計り、是より國産の一つに數へらるるに至る。寛政十二年八月に清國に輸出を試みた。是が苔の海外輸出の始めである。文化十三年四月壽泉苔發明の事によりて他のものの製造を禁じて遠藤家の特賣とする旨示達せらる、又同年「花形」「霞の花」を製出した。是れまでは原料川苔を秋月に持ち來て製造せしも不便を感じ文政六年に黄金川の邊に製造所を設けた。天保十三年十一月には幕府に獻じて國産盡時の捧物となつた。翌年八月には、公儀獻上品製造人と云ふので二人扶持を藩主より興へられ、原産地川筋及び製造所へ次の制札を建てらる。

公儀獻上御用之外此川筋川葺堅相障聞感並漁一切停止候事 郡奉行  
公儀獻上御用川苔製造所無用糞入ルヘカラス 郡役所

安政四年二月獻上御用の事により製造所の税金を免ぜらる。文久二年三月糖製「翠雲華」「川苔漬」製造を爲す。明治維新以來交通の便が良くなりし爲め販路も漸次擴張し、亦世人の嗜好の變遷をも鑑みて製法を刷新し壽泉苔を刻みて「松葉苔」と名づけ川苔を原形の儘に罐詰とし、又壽泉苔を調味して罐詰とせしものや翡翠と名づけて翠雲華と異りし菓子等を製出するに至り、名聲漸次現れしが明治三十年第二回水産博覽會神戸にて開催あるや奮つて出品せしに、宮内省御用の光榮を拜せし以來長くも宮中四大節の御饗宴には必ず御使用あらせらるゝやに洩れ承るにまで及びぬ。大正の初年から川苔水産池の大整理を行ひて其の増殖を計り一方製造機械器具の改良を計畫して着々と其の効を奏し、水車利用

の原料精練塵芥砂礫の除去装置や電氣動力により諸機械の運轉を爲し、工費の節約を計ると共に品質の向上に一層の意を用ひ今日にては豫定の改良を終了せんとす。販路はすでに朝鮮、滿洲、臺灣、青島、布哇、上海、New York に及び益々有望となりつつある現状である。

### 「かはたけ」の産地と壽泉苔の製法

「かはたけ」を産する黄金川は田圃の間を流れる小川であつて巾三四間より一二間位のものにして水深一尺内外なる此の川の水底に沈在してをり、産する場所は約二軒程のところである。近時においては川添の水田濕地等に少しの設備を施して之が養殖を行つて居る。「かはたけ」の生えてゐる所について詳しく言ふと、先づ一畝から六畝位の面積を有する區劃が澤山續いて、それ等が横には三列位から五列位曲り曲りして續いてゐる。即ち一体が川の様になつて居る、而して川上と川下の區劃との境は、せきしようを密にしかも條をなして續いてあるか、又は七八寸の高さのコンクリートにて境界する。しかも横の區劃との境は高さ二三尺巾三尺位の土堤にて作られてゐる。水は川上の區劃より川下に順々に流れる、その境界には三四ヶ所水の流入口と流出口とがある。その一區劃について見ると、底は砂礫で少し土が被さつてゐる所もある、表面には所々せきしようが續いてある。川苔はそれにかかりて生えてゐる、又此のせきしようは水の流れをゆるやかにする効も他方面においてある。上の様な効があるからしてせきしようが少い所には竹なぎを入れてせきしようの代りに使用されてゐる。かはたけは底に生えたりせきしようにかゝつたりして成育をして増殖してゐる。

壽泉苔の製造は終年行つて居るが四月頃より九月頃が盛んである。之が製法は先づかはたけを採集して來て之を選別をする。それは高さ七、八尺もある高所から斜に臺を作り、それに穴の異つた篩を五六個ならべて水と共にかはたけを流し滑らすのである。そして塵芥砂礫を除き更に人手をもつて混雜物を除き良く洗つて甕に入れ水を切つて後之を石臼にて挽き、それを更に良く練つた後瓦の上に厚さ一糎位に塗る、瓦の大きさは二十五糎位の巾に長さ四五十糎位である。之を納屋の欄上に並べて置き翌日これを剥ぎて半圓形の瓦の内側に付け、又欄上にならべて置けば水分は全部瓦が吸収して翌日には全く乾燥するに至る、之を剥いでよく洗ひ今度は板に張りつけて乾したる後一定の大きに周圍を截つて製するるのである。

## 壽泉苔の用途

### 1 かはたけ加工品

最初は壽泉苔のみなりしも漸次之が製法の研究が進むにつれて種々と其の數を増し現在にては次の様な數に及ぶにいたつた。壽泉苔及び浪の花、花形、松葉、壽泉苔調味、川苔、翠雲華、翡翠、川茸漬等なるも最も普通なるものは翠雲華である。

### 2 壽泉苔料理法

清水に二十分内外浸し置き厚さ一分五厘乃至二分位にふゆるを適度として使用する。最初はさみにて切り水に浸せば早く用に供せられ、特に急を要する場合には温湯に浸すを可とす。早く間に合ひて品質を損することなし。

### 3 用途

吸物について妙なり。併し別に面白き仕方あり、それは水に浸さざるものを長さ一寸幅は極めて狭く刻み置き豆腐の襷方に切りたるものを水に浸して沸騰せしめ、其の上に轉動するを待ちて、取置きたる水を極少量づつ其の上に撒布すれば、豆腐其の面に附着するをもつて之を取上げ何回も繰り返す時は恰も白萩の如く美觀を呈し吸物として雅致あり。中附としては先づ味を付け置き鶏卵を茹で黄味を裏漉にしたるものを適宜に混すれば風味良好なり。刺味なます等の取合せに妙なり。又鯛、鮪等のさしみに配すれば色合ひ特に面白く風味も引立つものなり。蒲鉾の渦卷に適し又鶏卵を用ひて渦卷を作るもよろし。卷すし、にぎりすし、ごもく、おきすし等の具に用ひて風味極めてよく、精進料理としては吸物酢あへ、白あへ、胡麻あへ等に適し、豆腐の裏漉に砂糖及鹽なごにて味を付け蒲鉾の如く渦卷となすもよろし。漬物としては一夜味噌に漬けて食膳に上せば妙味あり、永く漬くるも亦佳なり。野菜類との取合せもよく辛子漬にも適す。水菓子とせるものは熱湯をかけてそしてそれを冷して白砂糖を懸けて供すれば水菓子代用としても妙なり。

## 宮崎縣南部の魚類

畜三 林 正 一

いざりうを	<i>Antenuarius tudens</i>
まとうだい	<i>Zeus japonicus</i>
うみひごい	<i>Upeneus chrysopleuron</i>
あなはぜ	<i>Pseudolennius colloides</i>
たつのおとしご	<i>Hippoeampus coronatus</i>
べたい	<i>Sporus aries</i>
きだい	<i>Taius tumifrons</i>
しゆもくざお	<i>Alapias vulpinas</i>
くろだい	<i>Sparus moeracephalus</i>
いとひきあじ	<i>Rachycentron canadum</i>
とろぎす	<i>Parapercis pulchello</i>
こち	<i>Platycephalus indidicus</i>
かごかきだい	<i>Microacanthus slrigatus</i>
けんろくだい	<i>Chaetodon moaestus</i>
いとまきふぐ	<i>Aracuna aculeatu</i>
だるまおこぜ	<i>Frasa erasa</i>
ようじうを	<i>Syngnathus Schlegeli</i>
こんごうふじ	<i>Ostracion cornutum Linne</i>
ひふきようじ	<i>Syngnathus schlegeli Kaup</i>
ひめじ	<i>Pseuelupeneus bensasi</i>
つるまき	<i>Zebrios zebrinus</i>
こばんざめ	<i>Leptecheneis naucrates</i>
あんこう	<i>Lophionus setigerus</i>
しまぞい	<i>Sebastiechys crivvittatus</i>
やがら	<i>Fistularia petimba Lacepde</i>
しいら	<i>Cazyphana hippurus</i>
あら	<i>Mjhan spinosus Cuvier et Valenciennes</i>
すずき	<i>Latealubrax japonicus</i>
ねんぶつだい	<i>Apogon semillinacatus Temminck et Schlegel</i>

まあじ	<i>Trachurus japonicus</i>
あいご	<i>Siganus fuscens</i>
このしろ	<i>Konasirus punctatus</i>
ざんかめあじ	<i>Caranx sexfasciatus</i> Quoy
あかえい	<i>Dasybatus akajec</i>
かすざめ	<i>Squoteno japonica</i>
まつだい	<i>Looetes surinamensis</i>
ざんかがみ	<i>Mene maculata</i>
しまいさぎ	<i>Theapan oxgrhynchus</i>
ひらめ	<i>Parolichthys abivaeus</i>
かんぞうひらめ	<i>Pseudarhombus cinnamoameus</i>
あかしたひらめ	<i>Arciscus jayneri</i>
かわはぎ	<i>Cantherines modestus</i>
さかたざめ	<i>Rhinobutus schlegeli</i>
とちざめ	<i>Triahis scyllicum</i>
さばふぐ	<i>Spheroides spadiceus</i>
くさふぐ	<i>Spheroides niphobies</i>
おほかます	<i>Sphraena nigripinnis</i>
ちだい	<i>Evynnis cardinalis</i>
そといわし	<i>Albula vulpes</i>
ちよおちあようを	<i>Chaetoda collaris</i> Rloek.
はたたてだい	<i>Heniochus dipneute</i> Tardon
たちうを	<i>Trechiurnus japonicus</i>
にべ	<i>Nihea mitsukurii</i>

註 以上は昭和八年夏期休暇に油津に滞在し、ここを中心として調査した結果である。(1933. 12. 23記)

## 青島貝類目録追補

### 大 賀 勉

筆者は雑誌「日向」第十一輯・第十二輯に於て中島・四本兩氏と共に青島海産動物と題して、青島産の貝類を記録し、巻貝に36種、二枚貝に

13種、一枚貝に8種、他に1種、合計53種を發表して置いた。その後、調査の結果更に23種を發見し得たからここに追補いたしたい。尙、この他に不明の種が相當數あるが、これは他日發表いたしたい。

本調査に際し御指導を賜つた中島助教授に感謝する。又、材料の蒐集に盡力された岩切芳郎氏にも併せて感謝の意を表する。

### 巻貝の部

アハブネ	ヒラフネガヒ (平舟貝) 科
長20糎	巾15糎
カツラガヒ	タウカムリ (唐冠) 科
高65糎	直徑25糎
クダマキガヒ	クダマキガヒ (管巻貝) 科
長50糎	直徑15糎
	螺層11階

### 二枚貝の部

アカマテガヒ	マテガヒ (竹筴) 科
長25糎	巾18糎 高4.5糎
アリソガヒ	バカガヒ (馬鹿貝) 科
長110糎	巾56糎 高88糎
イソンジミ	キヌタマスネガヒ (磯眞蘇枋貝) 科
長35糎	巾12糎 高27糎
カガミガヒ	ハマグリ (蛤) 科
長55糎	巾20糎 高55糎
カバザクラ	サラガヒ (皿貝) 科
	小形 (大小不同)
サメザラモドキ	サメザラモドキ (擬鮫皿) 科
長32糎	巾20糎 高29糎
スダレガヒ	ハマグリ (蛤) 科
長73糎	巾28糎 高43糎
チリボタン	メンガヒ (面貝) 科
長32糎	高31糎
ナミノコ	ナミノコガヒ (波子貝) 科
長33糎	巾19糎 高17糎
ミゾガヒ	マテガヒ (竹筴) 科
長23糎	巾35糎 高10糎

## 一枚貝の部

クルスガヒ(別名フネガヒ)	ヒラフネガヒ(平舟貝)科
長22糎	巾15糎 高5糎
ニクイロカニモリガヒ	オノツノガヒ(鬼角貝)科
高37糎	直径8糎
ベツコウイモガヒ	イモガヒ(芋貝)科
高48糎	直径25糎
ベニイモ	イモガヒ(芋貝)科
高17糎	直径10糎 螺塔8階
ホンキヌタ	タカラガヒ(寶貝)科
長52糎	巾33糎
ホラガヒ	フデツガヒ(藤津貝)科
長215糎	直径115糎
ムシロイモ	イモガヒ(芋貝)科
長54糎	直径33糎
ヤクジマダカラ	タカラガヒ(寶貝)科
長55糎	巾33糎 高25糎
ヨロイノソデ	スキシヤウガヒ(水晶貝)科
長57糎	直径27糎
ツタノハ	バテルラ科
長22糎	巾17糎 高5糎

(12.25. 1933, 宮崎高等農林學校動物學教室にて)

## 宮崎附近蝶類目録

農 一 王 寺 幸 寛

宮崎市下北方を中心に双石山、青井岳に亘つて行つた昆蟲採集の採品の目録である。總數68種、四季により型を異にするものが10種餘あつたミカドアゲハ・サツマシジミ・ムラサキツバメシジミ・クロコノマテフインガキテフは南九州特有のもので、採集個体數も多かつた。

下掲目録中、◎印を附したものは筆者の採集には洩れたが存在することを示すものである。又春型、夏型を區別し得るものには□印を附して置いた。

### 1、あけはてふ科

- (1) アゲハテフ
- (2) キアゲハ
- (3) カラスアゲハ
- (4) ミカドアゲハ
- (5) ナガサキアゲハ
- (6) モンキアゲハ
- (7) クロアゲハ
- (8) ジヤコウアゲハ
- (9) ナナガアゲハ
- (10) アラスギアゲハ (クロタイマイ)

### 2、しろてふ科

- (1) キテフ
- (2) モンキテフ
- (3) モンシロテフ
- (4) ツマグロキテフ
- (5) スヂグロテフ
- (6) ツマキテフ

### 3、まだらてふ科

- (1) アサギマダラ

### 4、じやのめてふ科

- (1) コノマテフ
- (2) クロコノマテフ
- (3) クロヒカゲ
- (4) ヒカゲテフ
- (5) キマダラヒカゲ
- (6) コジヤノメ
- (7) ヒメジヤノメ
- (8) ウラナミジヤノメ
- (9) ヒメウラナミジヤノメ

### 5、たてはてふ科

- (1) キタテハ
- (2) ヒメアカタテハ
- (3) アカタテハ
- (4) ルリタテハ
- (5) ヒオドシテフ
- (6) スミナガシ
- (7) ゴマダラテフ
- (8) コムラサキ
- (9) ウスグロコムラサキ
- ◎ (10) オホムラサキ
- (11) コミスヂ
- (12) イシガキテフ
- ◎ (13) サカハチテフ
- (14) ウラギンヘウモン
- (15) オホウラギンヘウモン
- (16) ウラギンスヂヘウモン
- ◎ (17) オホウラギンスヂヘウモン
- (18) ミドリヘウモン
- (19) クモガタヘウモン
- (20) ツماغロヘウモン
- (21) メスグロヘウモン
- (22) イチモンジテフ

## 6、しじみてふ科

- (1) ヤマトシジミ
- (2) ツバメシジミ
- (3) ムラサキツバメシジミ
- (4) ムラサキシジミ
- (5) ウラナミシジミ
- (6) トラフシジミ
- (7) ウラギンシジミ
- (8) ルリシジミ
- (9) ベニシジミ
- (10) サツマシジミ

## 7、せせりてふ科

- (1) ダイメウセセリ
- (2) アラバセセリ
- (3) クロセセリ
- (4) キマダラセセリ
- (5) ギンイチモンジセセリ
- (6) ホソバセセリ
- (7) オホチャバネセセリ (ハナセセリ)
- (8) チャバネセセリ
- (9) コチャバネセセリ
- (10) イチモンジセセリ

(昭和八年十二月十一日記)

## 宮崎市附近の蛾類

### 農 三 山 口 県

昆蟲類中、蛾亞目は特に種類多く、邦産のものは既に約4000種を算してゐる。その幼蟲は俗にイモムシ、アラムシ、キクヒムシ、テムシ、シヤクトリムシ、ネキリムシ等と稱され、農林業には關係の殊に深いものである。

私は宮崎市附近の蛾類に興味を持ち、昭和八年四月十七日から十二月末日までの間に於て、宮崎市附近を中心として、野外採集を行ひ、或は幼蟲飼育を行ひ、或は燈火及び花に集るものを採集して當市附近に於ける蛾類の種類の大要を知ることが出来た。下に之を掲げて同好の士の參考に供する。

研究中懇切に御指導を賜つた中島助教授にここに厚く謝意を表する。

#### 材 料

##### 材料の蒐集 園

市内、市附近、佳吉、廣瀬、佐土原、川南、高鍋、清武、田野、都城  
青島、飫肥、油津、倉岡

期 間 4月17日より12月末迄夜晝共

#### 採 集 品 目 録

## すすめが科

きいろすすめ、とびいろすすめ、おほしもふりすすめ、ほうじやく、  
ほしほうじやく、くろほうじやく、すきばほうじやく、くるますずめ  
くろすかしば、おほすかしば、めんがたすすめ、うちすすめ、ももす  
ずめ、せすぢすすめ、いつほんせすぢすすめ、しもふりすすめ、べに  
すすめ、こすすめ、えびがらすずめ、くちばすすめ、ぎんほしすすめ  
しやちほこ蛾科

もくめえぐりしやちほこ、つまきしやちほこ、ぎんもんすすめもぎき  
しやくとり蛾科

ちづもんあをしやく、しろすぢつばめあをしやく、しろふあをしやく  
かぎばあをしやく、びろおきなみしやく、つまきうすぐろなみしやく  
きおびべにひめしやく、かほぐろひめしやく、ふたつめしろひめしやく  
く、きふたすぢえだしやく、しだえだしやく、ひようもんえだしやく  
まだらきしたえだしやく、ゆうまだらえだしやく、うめえだしやく、  
とんほえだしやく、あみめおほえだしやく、きおびごまだらえだしやく  
く、くろすぢえだしやく、ちやまだらえだしやく、ふとすぢをえだし  
やく、うすきつばめえだしやく、きまだらつばめえだしやく、はがた  
きえだしやく、うこんえだしやく、つまきうすぐろえだしやく、はぐ  
るまえだしやく、あかえだしやく

## こくが科

こくが、いが、こいが、もうせんが

## ひけながが科

るりまへひけながが、うすいろひけながが

## ながが科

こなが、なつめこが

## ばくが科

ばくが、いもこが、やながはこが、うすぐろこが、へりぐろこが、  
くろもんしろこが

## かまが科

わたみが、みかんねぐろかまが、ひめごまだらこが

## かざりが科

かきのみが、りんごふさが

## はもぐりが科

もものはもぐりが

## りんが科

しんくい、ももひめしんくい

## はまきが科

くわひめいとびきはまき、ちやいとびきはまき、とびもんきはまき、  
とがりとびはまき、やなぎはまき、ふたつめはまき、くりのみが、な  
しひめしんくいが、りんごしろひめはまき

## はまきもぎきが科

つまきはまきもぎきが、こうぞはまきもぎきが

## めいが科

つとが、ほそすぢつとが、しろすぢつとが、ぎんすぢつとが、さつま  
つとが、うすぐろつとが、にくわめいが、さんくわめいが、くろすぢ  
のめいが、せすぢめいが、くわのめいが、あわのめいが、なのめいが  
わたのめいが、こめのしまめいが、ひめしろおびのめいが、もものめ  
いが、まめのめいが、はちみつが、なしまだらめいが

## やが科

ともえが、はぐるまともえが、おほともえが、しろすぢともえが、こ  
しろしたば、きしたば、くびぐるせだが、きんすぢあつば、くろきし  
たあつば、ひめもくめよとう、たまなやが、うんもんくちば、よとう  
がむくけこのは、ふたふびこやが、しまからす、あけびこのは、かぶ  
らやが、あみめりんが、みつてんあしぶとが、ふたとりが、しんじゆ  
きのかわが、あかむぐりはが、ふさもくめが、かばふきしたば

## まだらが科

さつまにしき、うすつばめが、ほたるが、しろしたほたるが

## かのこが科

かのこが、きはだかのこが

## きぎが科

まだらまぎか、あかしままぎが、ひとつめまぎが

## すかしばが科

ももぶとすかしば、ぶぎうすかしば

## かれはが科

おびかれは、まつかれは、つかかれは、たけかれは

## かぎば蛾科

おほかぎば、すかしかぎば、うすぎめかぎば

## いらが科

いらが、なしいらが、あをいらが

ひとりが科

べにもんひとりが、まへあかひとり、ごまだらきこけが、くわごまだらひとり

せみが科

せみやさり

ほくとうが科

ごまふほくとうが

みのが科

みのが、ちやみのが

ぎくが科

ちやぎくが、きぎくが、すかしぎくが、まいまいが

こうもりが科

きまだらこうもり、こうもりが

とらが科

べにもんとらが、とらが

つばめが科

ぎんつばめ、おほしまつばめ

おびが科

おびが

いほたが科

いほたが

やまめ科

をながみずあを、やまめ、さくさん、くずさん、しんじゆさん

かひこが科

かいこ、くわご

をが科

あけはもぎき

一年を通じて蛾の發生多く其の種類に富むが、殊に5月から10月頃迄は最も多く夜燈火にも、やが、ひとりが、すすめが、めいが等の類が集つて来る。12月20日にめいがの一種が燈火に飛び來つたのが採集の最後であつた。

## 宮崎市附近昆虫目録

畜 一 中 野 正 隆

- カミキリムシ科  
 ペニホシカミキリ *Eupromusruber* Palmer 昭8.6.4 水源地
- ゲンゴロウ科  
 コガタノゲンゴロウ *Cybister truncatus* Oliver. 昭8.9.4 高農水田
- カミキリムシ科  
 ゴマダラカミキリ *Melanausterchinensis* Förster. 昭8.7.3 下北山
- タガメ科  
 タガメ *Kirkaldyia deyrollei* Villefroy. 昭8.6.30 高農水田
- カミキリムシ科  
 ノコギリカミキリ *Prionus insularis* Motschulsky 昭8.7.1 下北
- セミ科  
 ヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis* Matsumura 昭8.7.13 下北
- ゲンゴロウ科  
 マルガタゲンゴロウ *Graphoderes adamsi* Clark. 昭8.9.4 高農水田
- ガムシ科  
 ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky. 昭8.9.3 高農水田
- オサムシ科  
 エゾカタビラオサムシ *Calosoma maderae* F. 昭8.6.30 下北
- ゴミムシ科  
 キベリアオゴミムシ *Chlaenius inops* Chaud. 昭8.9.4 同
- ミズカマキリ科  
 タイコウチ *Lacatrephes japonensis* Scott. 昭8.9.3 高農水田
- コメツキムシ科  
 サビキコリ *Lacon binobulus* Motsch. 昭8.9.7 宮崎神宮附近
- ゴミムシ科  
 オホキベリアオゴミムシ *Chlaenius culminatus* Bat. 昭8.9.4 下北
- トンボ科  
 テウトンボ *Rhyothemis fuliginosa* Seelys. 昭8.6.21 同
- イトトンボ科

- モノサシトンボ *Copera annulata* Selys. 昭8.6.21 下 北  
トンボ科
- マユタテアタネ *Sympetrum eroticum* Selys. 昭8.6.23 高農内  
トンボ科
- ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculate* Linne 昭8.6.20 下 北  
ヒトリガ科
- アカハラゴマダラヒトリ *Spilosoma punctari* Stoll 昭8.7.16 高農内  
セセリテフ科
- キマダラセセリ *Padraona dara flava* Murray. 昭8.7.15 高農内  
ゴキベリ科
- クロゴキブリ *Periplaneta picea* Shir. 昭8.7.15 同  
ムシヒキアブ科
- サキグロムシヒキ *Machimus scutellaris* coquillett. 昭8.7.26 同  
ミチシルベ科
- ミチシルベ *Cicidela chinensis* Degeer. 昭8.7.21 下 北  
マダラガ科
- サツマニシキ *Erasonia sangaica* Moore 昭8.7.2 同  
マダラテフ科
- アサギマダラ *Danais tytia nipponia* Moore 昭8.7.21 同  
タテハテフ科
- ツマグロヒヤウモン *Argynnis hynerbius* Johanssen  
昭8.6.26 高農内  
タテハテフ科
- ヒヤウモンテフ *Argynnis daphne rabdia* Butler. 昭8.5.7 下 北  
タテハテフ科
- メスグロヒヤウモンテフ *Argynnis sagana* Poubleday.  
昭8.6.8 下北堤  
ジャノメテフ科
- コノマテフ *Melanitis leda* L. 昭8.6.8 下 北  
タテハテフ科
- イシガキテフ *Cyresthis thyodamas* Boisd. 昭8.5.7 下北水源地  
アゲハテフ科
- アオスジアゲハ *Papilio sappedn* L. 昭8.7.5 下 北  
アゲハテフ科

- アオスジアゲハ *Papilio sapedon* Linneus. 昭8.5.7 下 北  
シロテフ科
- スジグロシロテフ *Pieris melete* Ménétries 昭8.6.27 同  
シロテフ科
- モンシロテフ *Pieris rapae crucivara* Borsduval. 昭8.7.3 同  
シジミテフ科
- ベニシジミ(春型) *Chrysophanus plaeas* Linnaeus. 昭8.6.21 高農内  
タテハテフ科
- コムラサキ *Apatura ilia substituta* Butler. 昭8.7.6 下 北  
アゲハテフ科
- ナガサキアゲハ *Papilio memnon* Thunbergi Siebld. 昭8.7.6 同
- アゲハテフ科
- ジャカウアゲハ *Papilio stcinous* Klug. 昭8.6.17 同  
アゲハテフ科
- クロアゲハ *Papilio demetrius* Cramer. (♀) 昭8.6.23 同  
アゲハテフ科
- アゲハテフ *Papilio xuthus* Cramer. (♀) 昭8.6.13 高農内  
ヤガ科
- トモエガ *Speiredonia japonica* Guinie. 昭8.8.29 同  
タガメ科
- コオヒムシ *Diplonychus japonica* Vuillefroy. 昭8.7.26 高農水田  
テントウムシ科
- ニジウヤホシテントウムシ *Epilachna niponica* Lewis 昭8.7.11 高農農場
- ミヅムシ科
- ミヤケミズムシ *Sigara miyakei* Matsumura. 昭8.9.7 高農水田  
テントウムシ科
- ナナホシテントウムシ *Coccnella bruckii* Mulsant 昭8.9.7 宮崎神宮附近
- カメムシ科
- マルシラホシカメムシ *Eusarcoris guttiger* Thunberg 昭8.8.28 下 北  
ヤンマ科

カトリトンボ *Anotogaster siefeldii* Selys. 昭8.9.9 高農農場内  
 ハムシ科  
 アカクビナガムシ *Crioceris subpolita* Motschulsky.

昭8.5.7 高 農

オサムシ科

ゴミムシ *Anisodactylus signatus* Illiger. 昭8.7.26 下 北

## 双石山採集

トンボ科

ウスバキトンボ *Pantala flavescens* F. 昭8.7.2

トンボ科

シヤウジヤウトンボ *Crocothemis servilia* Drury 昭8.7.2

タマムシ科

オバタマムシ *Chalcophora japonica* Gory. 昭8.7.2

ハムシ科

アカクビナガハムシ *Crioceris subpolita* Motschulsky 昭8.7.2

ミチシルベ科

ミチシルベ *Cicindela chinensis* Degeer. 昭8.7.2

タテハテウ科

イシガキテフ *Cyresthis thyadamas* Boisd. 昭8.9.3

アゲハテフ科

ジヤカウアゲハ *Papilio sleinuous* Kluy. 昭8.9.3

## 青井岳の採集 (昭和八年五月一日)

マダラガ科

ホタルガ *Pidorus glaucopis atratus* Butlet

タテハテフ科

ヒヤウモンテフ *Argynnis daphne rabdia* Butler

タテハテフ科

アサギマダラ *Ecnais tytia nipponica* Moore

テンサン科

オホミズアラ *Actias artemis* Bremer.

ヤンマ科

ミルンヤンマ *Planaeschna milnei* Selys.



- P. serpedon* Linnaeus クロタイマイ (アラスチアグハ)
- Pieridae 粉蝶科
- Pieris rapae* Linnaeus モンシロテフ
- ~~P. napi~~ <sup>*Melit*</sup> *P. napi* Linnaeus スヂグロテフ
- Midea scolymus* Butler ♀ ツマキテフ
- Colias hyala* Linnaeus モンキテフ
- ~~*Terias clatta*~~ *Terias clatta* Boisid ツماغロキテフ
- ~~*Eurema docto*~~
- Nymphalidae タテハテフ科
- ~~*Araschnia burejana*~~ *Araschnia burejana* Brem サカハチテフ春型
- Pichorrhagia nesimachus* Boisid スミナガン
- Licaenidae シジミテフ科
- Amblypodia japonica* Murr ムラサキシジミ
- Danaidae マダラテフ科
- Danais tytia nipponica* Moore アサギマダラ
- Hesperiidae セセリテフ科
- Notocrypta curvifascia* Feldl クロセ、リ
- Rhopalocampta benjamini* Guer アタバセフリ
- Satarupa tethys* Men ダイメウセ、リ
- Lepialina unicolor* Brem et Grey. ギンイチモンジセフリ
- Parnara guttata* Brem. イチモンジセフリ
- Satyridae 蛇目蝶科
- Melanitis leba* Linnaeus コノマテフ
- Saturniidae 天蠶蛾科
- Actias artemis* Brem オホミズアラ? (体色黄褐色を呈せるもの)
- Geometridae 尺蛾科
- Thinopteryx crocoptera* Kallar キマダラツバメエダシヤク
- Ephoria arenosa* Butler サラサエダシヤク
- Epicopeidae アグハモドキ科
- Epicopeidae hainesii* Holland アグハモドキ
- Arctiidae 燈蛾科
- Spilosoma lubricipeda* キハラゴマダラヒトリ
- Noctuidae 夜蛾科
- Nyctipao crepuscularis* Linnaeus オホトモエ
- Speiredonia japonica* Guénée トモエガ

## NEUROPTERA 脈翅目

Corydalidae 蛇蜻蛉科

Protopermes grandis Thumberg ヘビトンボ

## PLECOPTERA 積翅目

Perlidae 積翅蟲科

Perla tibialis Pictet カワゲラ

## TRICHOPTERA 毛翅目

Leptoceridae 長角石蠶科

Mystacides azurea Linnaeus アオヒゲナガトビケラ

## ODONATA 直翅目

Libellulidae 蜻蛉科

Orthetrum albistylum Selys シホカラトンボ

Calopterygidae 河蜻蛉科

Mnais costalis Selys カハトンボ

Calopteryx cornelia Selys ミヤマカハトンボ

## RHYNCHOTA 有吻目

Coreidae ヘリガメ科

Molipteryx fuliginosus Uhler オホヘリガメ

Jassidae ヨコバヘ科

Cicadella ferruginea Fabricius ツマグロオホヨコバヘ

以上記した昆蟲は昭和八年五月七日リソネ會主催青井岳採集會當日の採集品の目録であるが、記すところ僅かに四拾數種にすぎない。五月頃の採集品として非常に其の種類の少ないのは一つは最も普通に居る種類を採集しなかつた事云ふ事が一大原因であるが、他面種類の少なかつた事も又否めない事實である。此の事は第三回目の採集の時にも同様であつた。併しながら種類は少なかつたが此の外に於てマダモトノミササ、クロハナムグリ、エソカタビロオサムシ、サラサエダシヤク、アゲハモドキ等が今回の採集目録に見られた事は快心の事であつた。又平素は非常に飛翔が速くて採集し難いアナバセモリがイチゴの叢中に數十頭も其の花蜜を吸収して居たのを発見し易々數頭を手に入れる事が出来たのも愉快な事であつた。尙當日指導を賜つた中島先生並びに貴重な標本の自由借覽を許された同級生諸兄に對して御詫びをしなければならぬ事は Hymenoptera (膜翅目) の目録を作り得なかつた事であるが、此は次回に必ず發表するつもりであるから御諒恕をお願いする。(昭和八年十二月二十一日記)

## 優 曇 華

## 四 本 正 秋

本年の五月三十日に、化學に居られる「氏が私の室に、「四本君是れは何んだらうか」と言つて一枚の密柑の葉を持つて來られた。私は密柑の葉を受取つて、ウドンゲが附着してゐるのを見て「これはウドンゲです」と即ち草蜻蛉類の卵である事をお答へした。而してそのウドンゲをば私が預いて、ペトリ皿の中に入れて飼育を初めて見た。その時分卵は大分黒味を帯びてゐたので、此奴は二三日中に孵化するだろうと樂に待つてゐた。

明けの日の六月一日に調べて見ると、恰も良し丁度孵化する處であつた。ウドンゲは御承知の如く、柄の先に卵が附着してゐるのであるが、此の卵殻の先端が破けて、先づ胸部背面から出て來る。その時分觸角、脚、尾部は揃えて出て來、凡そ八分通り出ると幼虫は次第次第に、尾部は固定したまま、頭の方を持ち上げて來る。すると附屬器は各々バラバラに離れて來るが、尙も虫は逆になつて、殆んど背面が卵柄に密着するまでヒツクリ返る。而して觸角、脚等をバラバラにする。斯くして暫くすると体を元の位置に返し、脚で葡萄して柄を傳つて降り、食物を探し歩くのである。

草蜻蛉類は幼虫成虫共に齧虫を食べるのであるが、飼育しやうと思ひしものの、齧虫を探すに非常に骨の折れることと思ふてゐた。處が計らずも化學實驗室と、動物實驗室との間に桃の木が三本程植えてあるが、その桃の木にそれはそれはおびただしい齧虫の寄生してゐるのを見付けたので、此れ幸ひと毎日捕えて來ては飼育した。

幼虫は初め齧虫を食べるのかと思ふてゐたが、此れは食べるのではない。此の幼虫の形態の事は他日に譲つて、幼虫は大きな尖い兩方からはさみ得る牙一大顎だろふと思ふが、一を持つてゐて、その下に又それよりは細い牙を持つてゐる。上の大きな方で、ジツト齧虫の体をはさみ下の小さい牙で血液を吸収するのである。一匹の齧虫を吸収して皮のみになすまで凡そ十分位掛る。斯くして次第に肥大して十日位にして繭を作り中に化蛹する。その繭は白く、トテモ可愛い小さなものである。堅は可成りある。化蛹の後凡そ十二三日して緑のスガスガしい翅を持つた成虫が出て來る。成虫は交尾産卵が濟めば直ちに死ぬ様に、兎に角短命

な列に出るのであるが、私が桃の木から六匹の成虫を捕えて来てベトリ皿の中に入れて置いた處、一匹はその當日、三匹は四日目、二匹は六日目に死んでゐる。

T氏から貰つたのは密柑についてゐたのであるが、桃の木にも澤山ついてゐたので、それを材料として幼虫期間に於いて何の位の蚜虫を食べるか調べて見た。極く少数の物を以つての調査であるから正確なものとは言ひ得ない。

	No.1	No.2	No.3	投與蚜虫數
6月13日 (1日目)	12	9	17	30
14日 (2日目)	13	10	6	30
15日 (3日目)	10	9	10	10
16日 (4日目)	5	14	8	15
17日 (5日目)	18	11	17	20
18日 (6日目)	40	28	40	40
19日 (7日目)	65	70	70	70
20日 (8日目)	91	94	78	100
21日 (9日目)	62	98	56	100
22日 (10日目)	化蛹	14	化蛹	50
計	316	357	302	

初め二日はさの位食べるか不明の爲凡その數量を與え、六日目から急に食べる量が増加した。七日目、八日目は盛食期と思ほしく、不足して補つた程で、充分飽食せしめねば今少し合計數を増加する様に思はれる。

以上の如く幼虫は一匹で一粗雑な調査ではあるが一上の如き數量の蚜虫を捕食するので、蚜虫の被害が幾分軽減されることと思ふ。一匹の雌は凡そ一度に十個内外の卵を産むのであるが、此の卵から出た幼虫が上の如く食べるので、蚜虫の殺される數はおびただしいものであらう。

先は成虫も蚜虫を食べると述べたが、その量は幼虫に比べれば數えるに足りない程少い様である。私はまだ産卵の状態をば見てゐないのであるが、横山先生の本を見ると、尾端を曲げて密着せしめてゐるが、次第次に尾を持ち上げて行くと柄が出来その柄の先にボツと一個の白い卵を附ける、と書いてある。ウドンゲは草蜻蛉類が作るのであるが、私の觀察する處では、ヨツボンクサカゲロウとクモンクサカゲロウの二ツは間違ひなくウドンゲを作る。

ウドンゲに就いては昔から良く縁喜を擦ぐのであるが、要するに是は吾々人間の目に觸れ難く、従つて珍らしい物であるが故であらう。又そ

の構造が如何にも神秘的で、天から降つたか、地から湧いたか、知らぬ間に作られてゐるが爲であろう。(1933、9、30)

## 宮崎縣のひる及びみみずに就て

農 三 村 木 香

### I 宮崎市を中心とする分布状況

体節動物のヒル、ミミズは數に於て實に多いものであるが、其の種類に於て甚だ少ないのである。採取したものを舉げるとミミズ六種ヒル八種で其中三種は不明なものであつた。宮崎市を中心として其の分布状況を見るに、ヒル類に於て最も廣く且澤山ゐるものはシマインビルである。殆んど至る所に生存して居る。最も澤山ゐるのは赤江村、古城町である。本庄、綾、清武、田野、高鍋、富田でも多々採取することが出来た。ウマビル、チスヒビル、チャイビル、マネビルは其の数が少ない。ウマビル、マネビルは常に濁水の溜つてゐる湖沼に生存して居る。江平池には可なり多くゐる。下北及農事試験場前にある水溜にも居たのである。チスヒビルは赤江、都農で採取した。チャイロビルは本校水田附近に居る。

ひるの分布状況より考へ見るに一般に山間地の冷水の湧き出る所や酸化鐵の湧き出る所はひる類の棲息するに不適當であることが知られる。又海岸近くには鹽分の害と又ハマガニの食物となるため其の数が大變少ないのである。

ミミズ類は至る所に棲息して居る。最も澤山居るのは普通のミミズである。耕作地に居るのは殆んど此の類である。腐植質多き土壤には繁殖旺盛である。オホミミズの如きば落葉等の腐植質の多く堆積してゐる山間地に見出される。

ウミミミズは海岸地帯では至る所で採取することが出来た。乙島及青島海岸に多く居る。

マミミズ、イトミミズ、エラミミズは水中に産するもので、此の類は非常に少ない。下北池で採取したのみであつた。

### II ひる、みみずの概括

ヒル、ミミズは雌雄同体である下等な動物である。故に内部的に特別

なる組織を有し特殊なる器官が發達し特殊なる作用を司つて居る。

交尾産卵にも他のものより一種異つた方法を取つて居る。

ヒル、ミミズの農業上或は人畜に及ぼす影響は可なり大なるものである。其の關係を述べて見ると次の如くである。

ヒルが古來から醫術上に惡血吸收に用ひられてゐることは一般によく知られて居る。近時此のために使用するテスヒルを育成して居る所もある。

然るに一方ヒルは耕作中の人畜の吸血をなす害は勿論作業能率を減少せしむることを擧げ得られる。而してヒルの繁殖を豫防驅除する必要がある。其の方法を次に擧げて見ると

- 1、耕作時は素足にならぬこと。
- 2、捕殺すること。
- 3、濕田及び湖沼の知き排水の出來得る處は排水工事を行ふこと。
- 4、石灰を反當40貫位施す時はヒルは著しく減少せしむることが出來る。
- 5、ヒルの産卵に必要な雜草及び他の雜物を除去すること。

等である。

次にミミズの農業上に及ぼす影響は土壤の理學的性質を向上せしめる即ち土中に無数の小穴を設け氣流を良好にし且好氣性菌の繁殖を促すものである。尙ミミズの体内を通つた有機物は糞となつて土壤に肥料分を與へてゐる。故にミミズの食糧たる有機物を多量に施すことはミミズの繁殖を旺盛にし其の効果を益々擧げ得られることとなる。一方ミミズの不利なる點として播種したる小種子を浮きあがらしめ發芽を害し若葉を枯死せしめることがある。併し、さう害の大きいといふわけではない。

尙ミミズを乾燥せしめ粉末とし地龍と稱して賣り出されてゐる。解熱劑として非常に効果のあるものといふことである。此の應用方法の研究も今後益々發達するものと考へられる。

### III 採 取 目 録

#### みみず類

みみず、しまみみず、うみみみず、まみずいとみみず、おほみみず  
えらみみず。

#### ひる類

まねひる、うまひる、しまいしびる、ちすいびる、ちやいろびる。

次に採取地及採取種類を擧げる。

- 1、本校水田
  - みみず二種……………みみず、しまみみず
  - ひる二種……………しまいしびる、ちやいろびる
- 2、宮崎縣兒湯郡高鍋町
  - ひる一種……………しまいしびる
- 3、宮崎縣兒湯郡富田村
  - ひる一種……………ちやいろびる
- 4、宮崎縣兒湯郡木脇村
  - ひる一種……………しまいしびる
- 5、宮崎縣兒湯郡都農町
  - ひる二種……………しまいしびる、ちやいろびる
- 6、宮崎市外赤江町
  - みみず二種……………みみず、しまみみず
  - ひる二種……………しまいしびる、ちすいびる
- 7、宮崎市古城町
  - ひる一種……………しまいしびる
- 8、宮崎縣宮崎郡清武村
  - ひる一種……………しまいしびる
  - みみず一種……………しまみみず
- 9、宮崎縣宮崎郡青島村
  - ひる一種……………しまいしびる
  - みみず一種……………うみみず
- 10、宮崎市江平池
  - ひる四種……………まねびる、うまびる、しまいしびる No.1  
(不名)
- 11、宮崎市下北方
  - ひる三種……………しまいしびる、うまびる No.2(不名)
- 12、宮崎縣田野村
  - ひる二種……………しまいしびる No.3(不名)
- 13、宮崎縣乙島
  - みみず一種……………うみみず
- 14、宮崎縣東諸縣郡本庄
  - ひる二種……………しまいしびる、まねびる

(昭和八年十二月二十三日記)

## 宮崎市附近の蜘蛛類

農三 矢野次郎

コガネグモ *Argiope amoena* L. Koch

普通に見る種類で、宮崎ではキンコブと云ふ。子供が捕えて喧嘩をさせる。

ナガコガネグモ *Argiope bruennichi* Scopoli

コガネグモに似てゐるが、腹部は長大で、數條の横紋がある。餘り見らない種類。住吉牧場の松林で採集した。

オホヒメグモ *Theripion tepidariorum* C. L. Koch

腹部は球形にして點斑がある。家屋、人家附近に多く條網を造るオニグモ *Araneus vtentricosus* Koch

初夏の候から秋にかけて夕刻出て、軒、電線に巢を作る大きな蜘蛛。腹部肩に鋭い隆起がある。

ヤサガタアシナガグモ *Tetragnatha japonica* B. et S.

次に述べるアシナガグモより少し細い。腹部は黄色で光る。

アシナガグモ *Tetragnatha praedonia* Koch

腹部は長い柱状。到る處に見るものである。

シロガネグモ *Leucauge beanda* L. Koch

腹部下面と側面上半は銀色で上面に、三本の暗褐色假面に一本の縦條がある。

ゴミグモ *Cyclosa 8 tuberculata* Kavschi

腹部中央尾部に突起を有する。皆で八個あり。巢の中に食滓を集めて、つゞりその中に潜んでゐるので、一見塵ばかりと思はれる

ヂグモ *Atypus Kavschi* Doenitz

垣根の下方に袋を地中に作り、その中に住むもので、つやのある蜘蛛である。大顎が良く發達して頭部の先端に突出してゐる。

アシダカグモ *Hetevopoda renatoria*

夏の夜なご、人家の壁に這つてゐる脚の長い氣味の良くない蜘蛛である。

チヤスヂハヘトリグモ *Plexippus paykulli* (audouin)

ハヘトリグモ中で最大のもので、体長は十耗を越える。体の上面中央に縦の條斑があつて、それは腹の後半に於て廣くなつてゐる

雄はその両側が濃い茶色であるから、この和名が起つたのである  
家の中にある。

ミスヂハヘトリグモ *Plexippus setipes* Karsch

前者に良く似てゐるが、体色は暗褐色で、腹部上面には三つの縦  
斑がある。家の中にある。

ハナグモ *Misumera tricuspidata*

草間に多い。腹部は緑色、脚は緑で黄色を帯びてゐる。脚は前二  
本が長く、後二本の二倍より長いのが特徴である。

ヲナガグモ *Ariamones cylindrogaster* Simon

大變に形態の變つたもので、腹部が小さく長く、延びてゐる。緑  
色を呈し、脚を揃えて、巢に下つてゐるのは、中々目に着きにく  
い。青島の林中に澤山ある。

カレハヒメグモ *Teutana teansvers ifoveata* B. et S.

腹部は長楕圓形、樹間に造巢し、昆虫を捕食す。枯葉に良く似て  
ゐる。

ササグモ *Oxyopes sertaus* Koch

草葉の上にて餌を捕食す。脚に刺の多いのが特徴である。

スヂブトハシリグモ *Dolomedes pallitarsis* B. et S.

腹部は卵白色で灰色の小點を撒布する。又廣い條が一線ある。水  
邊の草間に多し。

アヅマカニグモ *Xysticus insulicola* B. et S.

各地の草上を徘徊するもの。後二本の脚が前二本より更に短小で  
ある。カニに似てゐる。

スヂボソハシリグモ *Dolomedes augustivirgatus* Kishida

腹部は長く、中央に黒褐の條がある。背甲、腹部の斑がスヂブト  
ハシリグモと比べて細い。水邊の草間に多く、水面を走る。

タマゴグモ *Vonops corticalis* B. et S.

体長二耗内外の小型のもの、草間に多し。

シロガネキソウロウグモ *Argyrodes bonadea* Karsch

銀色に輝く、腹部の小さいもので、大きな外の蜘蛛の網に居候を  
する。

コサラグモ *Microneta mascula* Karsch

極く小さいもので一耗足らずで、草間に多い。

ヌサグモ *Lityphantes dubius* D. et S.

腹部に黒色の特異な斑紋を有する。

ドヨウグモ *Meta doenitzi* B. et S.

非常に綺麗な蜘蛛で田園に多い。夏の土用に出現する。

トウホシドヨウグモ *Meta decimpunctata* Kishida

腹部に十個の斑紋を有する。綺麗なもの。

(昭和八年十二月二十三日記)

## 宮崎縣産鳥類目録

農 三 赤 司 覺

### 鷺鷥科

かいつぶり はじろかいつぶり

### 鷺科

じいさぎ しらさぎ

### 鷺鷥科

うみう

### 雁鴨科

おしどり まがも まがん しがも ほほじろがも

### 鷺鷥科

くまだか とび はやぶさ

### 雉科

きじ やまさり うづら

### 秧鷄科

ひくひな ひめくひな くひな ぼん

### 鷓科

だいぜん たしき やましぎ たましぎ

### 鷓科

ゆりかもめ かもめ

### 鳩科

おをばと きじばと

### 杜鵑科

ほととぎす

## 佛法僧科

ぶつほうそう

## 翡翠科

かわせみ

## 梟鷹科

きうしうふくろう

## 蚊母鳥科

よたか

## 八色鳥科

やいろてう

## 雲雀科

ひばり

## 鵲鴿科

せぐろせきれい　うすすみせきれい　きせきれい

## 鳩科

ひよざり

## 鸚科

じやうびたき　とらつぐみ　つぐみ　あかはら

くろつぐみ　こまざり

## 鶺鴒科

おほるり

## 鶯科

おほよしきり　こよしきり　うぐひす　こむしくひ

## 鷓鴣科

みそさざい

## 燕科

つばめ　こしあかつばめ

## 蓮雀科

ひれんじやく

## 鴉科

もず

## 四十雀科

しじうがら　やまがら

## 鴉科

はしぶとがらす　はしほそがらす　かけす

## 掠鳥科

むくさり

## 繡眼兒科

めじろ

## 雀科

いかる まひわ うそ すずめ にうないすずめ

ほほじろ みやまほほじろ あをじ しめ

## 要 録

硫黄華による鳥類の白化 雀、十姉妹等の脱毛期に硫黄華を少量粟に混じて與へると褐色の羽毛が失はれて白雀、白十姉妹が生ずる。多量では有害であるが、少量では別段害がないやうである。(林三 別府 豊)

マユハキタケ青島に産す 昭和八年二月十九日に青島島内のタブノキの樹皮上で珍らしい菌叢を發見したが、その後精査の結果、マユハキタケ (*Trichocoma paradoxa* Jungh.) であることを知つた。本邦でも稀なる囊菌である。(日 野 巖)

十二月三十日にイシガキテフを獲る イシガキテフは双石山から青井岳方面に特に多い南九州特有の蝶であるが、昭和八年十二月三十日に宮崎市神宮町の自宅附近で捕獲した。採集月日と場所が注意に値するやうに思ふから記して置く。(農一 日野登米雄)

ニガクリタケの中毒 昭和八年九月二十日宮崎縣兒湯郡木城村大字高城字百合野に於て兒玉重行氏の一家四名が不明の蕈を食した中毒したので大騒を演じたが、その蕈を本校卒業生三輪景澄君が筆者に送付して下さつた。鏡檢の結果、ニガクリタケ (*Hypholoma fasciculare* Fr.) であることがわかつた。この蕈の中毒例はあまり聞かないが、勿論食用蕈ではない。長野縣では食用に供する場合には、茄子、豆腐なごと一緒に煮て食べるさうである。この場合の豆腐は食してはならぬとのことであるニガクリタケの中毒例として記して置く。(遠 藤 茂)

オホノムシタケ米粟に産す 宮崎縣兒湯郡東米良村大字眼鏡字古別當に於て同地郵便局長奥松氏夫人がオホノムシタケを獲られて筆者に惠贈さ

れた。寄主は方言マルガシラと稱する昆蟲の幼蟲で、同地ではこれがサルカキ（サルトリイバラ）に化すると俗傳してゐる。採集されたのは昭和七年七月一日とのことである。（日野 巖）

オホスカキビ寄島村に産す 筆者が昭和七年十月三十一日青島村で採集した *Panicum* はその後京大井理學士に送付して鑑定を乞ふとオホヌカキビとのことであつた。同氏によると、九州では初めての採集であるとのことである。（遠藤 茂）

マユハキツケ行澤山にも産す 日野氏が青島で初めて採集されたマユハキツケは、その後筆者は昭和八年三月二十四日に行藤神社境内の杉の朽株上で採集した。新産地として掲げて置く。（遠藤 茂）

挿木で出来た竹林 宮崎縣兒湯郡東米良村尾八重にユガコ（メダケのこと）の竹林が一反歩ほごあるが、これは今から約60年ほご前に燒畑を行つた折、その畑主が枝にしてゐた稈を地に挿したのが元で繁茂したものといふことである。台灣屏東の瑞竹林と思ひ合せて珍らしく思つたのでここに記す。（農二 日高 醇）

鏝 鑿 松 宮崎縣兒湯郡三納東笹ノ元にある有名な黒松を鏝松と稱し幹の處々環狀に鏝の如く垂れた部分がついてゐるのである。その鏝の部分の下部は蒲鉾狀に隆記してゐる。その数は西北面のみで20餘ある。松の高さ約22米、周圍3米に達する。昔はもう一本あつたが伐つたとのことである。傳説によると、天正五年伊東三位入道が米良に落ちて行く折、ここに休息し鏝を掛けたと傳へてゐる。品種的の形態的異狀であるか、後天的の生理的變化かそれとも病的變狀であるか判明しないが珍らしい畸形として報告する。（農二 日高 醇）

金明竹の産地 宮崎縣兒湯郡新田村祇園原河野正氏宅裏のマダケ林に4年前から毎年2本宛金明竹が生ずるさうである。一部分を神社に奉納したといひ、今では6本残つてゐる。（農二 日高 醇）

シマヘビとトカゲの闘争 昭和八年七月十六日に兒湯郡米良村瓢箪淵の一ツ瀬川に沿つた縣道上の排水路で起つた事件であるが、シマヘビの前面にトカゲが何も知らずに現はれたと見る間に突如シマヘビはトカゲの肛門の附近に噛みついて目にも止らぬ早業でトカゲをグルグル巻に捲き縮めた。トカゲも苦しみながらシマヘビに喰ひつかうとあせつたが遂に及ばず、約5分の後には敢えない最後をとけた。（農二 日高 醇）

宮崎市附近産蟲座二三 私の採集品から次の數種を摘記する。カシイボケフシは昭和八年七月三日に鰐塚山で得たが、カシの葉に直径2-3ミリの病狀物を生じ裏面は凹み黄褐色の毛苔を生じこれが後に暗褐色となる。この場合周圍に黄褐色の郡分を輪狀に残す。ヨモギケタマフシは同年四月三十日に市外源慈で得たが、ヨモギの葉裏、葉柄、莖に印圓形の灰褐乃至斑を生じ表面に白色長毛を密生する。直径8-9ミリの斑で、壁厚く中央に橢圓形の幼蟲室を作る。イヌツゲタマフシは同年五月鰐塚山で得たが、イヌツゲの葉腋の芽を球狀に膨大する。直径10-11ミリで、綠色漿質、圓筒形の幼蟲室を作る。幼蟲は体の半分を体外に出して蛹化する。ケヤキフクロムシは同年七月二十八日に寄宿舎の側で得たが、ケヤキの葉に黄褐色の袋狀体を生ずる。表面は平滑ではなく、側壁は薄く、單室多室である。幼蟲の脱出した孔は瘦側面に縦に割目を生じてゐる。高さ10-13ミリ、直径5-6ミリである。 農二（伊地知基重）

内大臣山の昆蟲 内大臣山とは熊本縣上益城郡瀨町から南方約三里半國見嶽(1738.9米)の山麓に住り、海拔1,000米を算する原始林に富んでゐる。私が昭和八年九月一日登山の折、イカリテフ、テングテフ、サカハチテフ、イチモンジ、ルリタテハ、アサギマダラ、ナガサキアゲハ、ウラギンヘウモン、ウラギンシジミ、コムスヂテフ、クロスヂテフ、ナナフシ、トラマルバチ、コハナモグリ、ヒメコガネ、キスヂハナナガバチ等を得た。（農一 岸本清三郎）

### 正 誤 表

頁	行	誤	正
10	20	南瓜のキメラ	蘭瓜のキメラ
10	22	カメラに	カメラに
10	22	カメラと	キメラと



## 宮崎リンネ會略史 [續]

山口県・村木香・伊地知重基・山中岩一

### 第四十三回臨時總會

期日 昭和八年一月二十三日午後七時

場所 合併教室

題

- |                 |       |
|-----------------|-------|
| 1. 開會ノ辭         | 幹 事   |
| 2. 小鳥二種紹介       | 岩 切 君 |
| 3. 南海産貝類の話      | 中島先生  |
| 4. 幹事改選         |       |
| 5. 會則一部變更に關する評議 |       |
| 6. 茶 話 會        |       |

講演略記

岩切君 胡錦鳥…赤胡錦鳥、黒胡錦鳥、黄胡錦の三種があるが或る學者の説に依ると赤胡錦が原種であるといふし、或學者は黒が原種だといふ。この鳥の雄雌の鑑別は、雄はサエツル又色が淡い。

脊黄青鸚哥……濠州の南の方に野生してゐる、巢は樹幹に穴をあけて作りその中で抱卵する、これは渡り鳥であるが、舎が先渡り住家に見つけてから早が渡つて行く、脚の指に特徴がある飼はれたのは今より 180年前が初めてである。50年前に初めて巢引きかされたのである。

この鳥は非常に變化性のあるもので最も顯著なのは羽毛である。綠、黄、空色、紫、灰白、白、雪白、柿色、黒(灰黒色)がある。又「コロ」と稱するは一生裸であるものさ、初め一年位裸で後に羽毛を生ずるものさがある。これの生ずる原因に就いては二ツの説があつて一は血族繁殖に依るものさ他は若き親に原因あるものさの二つである

中島先生 四國九州臺灣に亘つて貝類について御話さる。全世界で貝と稱するものは1萬程あるが其の中我國には3000を産する。

九州 ヨロヒソソテ、ウラスヅマヒソソテ、ナツモモ、クルマガヒ

九州、四國 シマアラレ

九州 四國、琉球 マヒソソテ、コモンダカラ

九州、琉球 シヨウジヨウガヒ、アカヒガレイシ、ヲユウキユウヒアフギ、ツユウドウマクラマンホイラ

九州、小笠原 ムラサキイガレイシ

九州、小笠原、琉球 レイシダマシ

- シヤガウ  
九州、小笠原、四國 クチムラサキ  
ダカラ  
九州、四國、琉球、小笠原 サラサ  
ミナシ、ハナビラダカラ  
九州、臺灣 スイダガイ  
九州、四國、臺灣 ムラサキガヒ  
九州、琉球、臺灣 サツマツブリ、  
ミミガヒ、サラサバテイ、カ  
マアナゴ、マンホーガヒ、カ  
ハラガヒ、ムラクモダカラ  
九州、小笠原、琉球、臺灣 クモガ  
ヒ  
小笠原、カサガヒ  
琉球 フジツガヒ、コハクダマ、ヒ  
メホシダカラ、タツマキ、ニ  
シキミナシ、ハラダカラ、ヒ  
ナツル、ミノムシカビ、リウ  
キウアファイ、キバタケ、アフ  
ムガイ、シアノメダカラ  
小笠原、琉球 リウキエウタケ  
琉球、臺灣 ニシキアマチブネ、タ  
ガヤサンミナシ、ペニダケ、  
クロミナシ、テウセンブデ、  
ホニノツノガヒ、ウミウサギ  
ヤクワウガヒ、リウテン、ホ  
ラガヒ、イトマキボラ、ツキ  
ガヒ  
八丈島、小笠原、琉球、臺灣 ハチ  
ダヤウダカラ

#### 第四十四回例会〔送別會〕

期日 昭和八年二月十四日

場所 合併教室

題

1. 開會の辭 幹 事  
2. 金魚の飼ひ方 農三 河野君

3. 冬虫夏草 日野先生  
4. 會計報告 前 幹 事  
5. 茶 話 會  
6. 閉會の辭 幹 事

#### 講演略記

河野君 元來金魚はブンキ2年明の國より渡來したもので、人為淘汰の結果色々の形のものを生じた、鱗に種々なものがある。又尾の形には三つ尾、四つ尾等がある。又一般の魚と同様冬期は不活潑で7—8月より食欲を増すものである。交尾産卵期は4—7月である分けて和金(ロキン)、蘭鱒(ランチュウ)、琉金(リュウキン)で其中蘭鱒はセビレが無くて体が丸い、振り動がして遊ぶこと及び尾鱗の長いことで區別が出来る。飼料 生餌としては、ホーブラ、イトミミズ、ミザンコ、煉餌ソーメン、モチ、麥飯、雞卵であつてソーメンは食欲の盛んな9月頃にあたへる、一度湯で脱脂してからあたへる。麥飯はこれも一度煮てからやる。幼少なときは頭大量稍成長したら頭半分の量が良い。流水をきらひ、水は青みたるをよしとし、換水の必要がある。又夏は注水の必要がある。

一、二月：十日に一回換水(半量宛)  
三月：十日に一回換水(一、二月よりやゝ多目)

四月：ク(この頃微生物が発生する)  
五月：ク(又交尾期である)

六月：月に二回位

七、八、九月：六日に一回(注水はP. M.5—4.)

十一月：十日に一回(注水は控へ目)

十二月：一月と同様

病氣は水、食物、其他に依る。

主なるものは

目の腫れる病——過食

蕨つまり——健康なき糸の様に出してあるものが出ないもので、針て出すがよい

子つまり——

錆病——除去する、胡シヨウ水で治すことが出来る。

慣れると尾で健否が判る。

日野先生 冬虫夏草

支那のものは *Cordyceps Sinensis* Sacc. である。これを酒で飲むと無病延命の効ありと云ふ。日本産のものは小原桃洞の著書にもある由。又筑後地誌略に記載されてある。日本のものは成虫はカメムシであるので和名をカメムシタケ *Cordyceps nutaus* Pat と云ふ。セミバナと云ふのはニイニイゼミの蛹につく。ツクツクボウシタケはミンミンゼミにつく。其他クモタケと云ふのはトタテカモにつくものである。又ありにも出来る。

外國にもあるが少い。1754年に蜂に寄生してあるのを発見してこれに「蜂植物」なる名をつけた。後に菌類の寄生であることが判つた。Cordyceps のものは *Isaria* とは胞子時代が異なるのである。

産地としては福岡縣八女郡矢部村が有名である。學校の標本もこの産である。筑後地誌略にあるものもこれに基いて學名を附したものである。宮崎にも何れある筈です。發生は6月乃至11月です。その寄主はマルカメムシ科カメムシ科、フクムシ科など十五科に亘つて寄生する。支那のはサナギタケ系のものである。

日本にはその産が頗る豊富であつて最も多いコレクシヨンは陛下の御蒐集品で、もご高輪御殿にあつたが、大震災に失はれて今は無い。

會計報告 幹 事

昭和七年度リンネ會會計報告

(一) 收入之部

	円
前年引繼高	27.55
昭和六年度會費	7.00
寄附金	7.25
早崎兄寄附	5.00
會誌賣上	2.10
昭和七年度會費	61.00
合 計	109.90

(二) 支出之部

西洋紙ラシヤ紙	0.57
帳面代	0.20
端書、切手	1.80
雜費	0.40
會誌印刷費	90.00
合 計	92.97

(三) 差引殘高 16.93

茶話會 日高嶺君の竹の話、會誌の問題に就いて色々議論が出た、印刷機を購入して學校で印刷する様にしたらとの説も出た……日野先生

終に山口君が臺灣の熊の皮を紹介した

紀念撮影

昭和八年二月二十五日

校內圖書館の東の芝生にて。

第四十五回例会

期日 昭和八年四月二十五日

場所 合併教室

題

1. 大木の話 日野先生
2. 私の見たる臺灣 農三 苗 村 君

3. 話 淺野先生  
講演略記

日野先生；大木の話

a. ユーカリ 500尺もあつた話

b. セコイヤ(世界爺)

イ *Sequia gigantea*

ロ *Secoia sempervipens*

等などでさてつもない大きい話ばかり  
あの米國の道が木につき當つてその木  
に穴をあけたのもこのセコイヤである  
(其他大きいことを表すために色んな  
話があつた) 東京小石川植物園にもセ  
コイヤがあつて相當大木である。鹿児  
島縣の大楠は69丈であるが日本最大の  
大木は7丈3尺5寸。宮崎縣では清武  
八幡様の楠が大きい、又杉では椎葉の  
八村杉が大きい。

苗村君；私の見た臺灣

牛はホルスタインは育たずに色の黒  
いもののみが育つ、豚はヨークシャー  
は育たずにパークシャーがよく育つ由  
臺北市の美麗なることは實にすばらし  
いもので枇杷の並木が美しいものでは  
ある。又商賣は内地人同志の商賣が主で  
本島人とはとても競争が出来ぬ。臺南  
は植物が變つて来る。高雄にはマンゴ  
ー、相思樹が多い。又飛行場が8つも  
ある。屏東には、製糖會社があつて本  
島人が多い又果物が大變多い。

恒春も訪れた。鷺鷥島の燈臺は支那  
が臺灣を領してゐた頃から最近迄世界  
第一のものであつた。これは支那本土  
から花崗岩を運んで作つたものである  
1ヶ小隊1年間の水を下の方に貯えて  
ゐる事が出来る由。南臺灣ではヤモリ  
が鳴き、夜リスが歩き廻る。生蕃人と  
本島人との話それに水牛の話をした

この水牛の角の切られぬ譯は荷物をの  
せて坂を下るさき有効であるから。又  
この角の生え方に二種があつて、曲つ  
てゐるものは粗暴で、あまり曲らざる  
ものは温和である。

昆蟲は、大体色彩が濃厚で、体が小  
さくなる。昆蟲採集にも種々人が来る  
が時に京染屋が来て参考にすることか  
で採集したりする由。

6月から10月が採集によいのである  
市街地には毒蛇、マラリヤ病の恐れは  
無い。水田はヒザまで折つて田の草を  
取るのだが、ここの二毛作は二毛作で  
も。内地に於ける一毛作と同じ様な收  
穫しかあがらぬこのこゝ、如何に蓬萊  
米を奨励しても、臺灣米を作る傾向が  
ある。又本島人は金をもうけるに公共  
的にはあまり支出せず寺を立てる。又  
時にバスをねぎする者もある。しかし感  
心なこゝには老人をいたわるこゝです  
霧社 鷺鷥島 華蓮港 等は昆蟲採  
集の適地としてよい所だ。

茶話會

宮澤先生のつゞきの御話、中島先生  
の御話、日高君の南那珂郡市木村の植  
物の様子其他を話し、岩切君臺灣の語  
を面白く御話しあつて、松原先生リン  
ネ會の當初、今と異つて数人同好の士  
が集つて午後等行はれてゐたこの語さ  
れた。

會況 本日の會は實に從來稀なる盛會  
であつた。人員が机の數に不足をつけ  
二机三人の變な座り方で御氣の静な諸  
君もあつた様だ。講堂の若き儘は立ち  
替る演者の話に皆一様耳をかたむけた

この盛會を招き得たのは裏に諸先生  
方の大變な御助を忘れてはならぬ。

本日の出席總員實に百三十名である。

前に發刊されてある本會誌新會員の方に買つて頂いた。一部25錢均一、殘僅に2冊。

#### 青井岳植物昆蟲採集會

昭和八年五月七日

主催 リンネ會

園藝會

記 日曜を利用し、又新入諸君の御案内を兼ねて園藝會を計りて上記の採集を行つた。

その日天氣晴朗、面にはやく空氣は冷めたく感ずる朝、汽車は常緑闊葉樹打續く中を走つて、青井岳驛に到着。宮澤先生の御指導でやつと熱くなつた山路にかゝる、こゝから虫を追い草を求めては上へさ上る。第一の峠を越せば道は上下して木は左右に益々繁くなつて来る。思ひ思ひに夫れ夫れの獲物を採れるので方方に散る。南半の木陰はキリシマエビネの可憐な花が咲きみだれ、所々ギンリョウサウのロウの様な白い鱗も美しい。やくあつて皆下を流るゝ小川に落ち合ふ、既に晝食を平げた連中も一緒に川に沿つて道を下り鐵橋をくぐつてしばし行く、休むにはもつてこいの清流のほそりで晝食紀念に寫眞を撮る、技師は農二長友君再び下つて山を越え縣道に出る。胸につかへさうな所もあつて午の太陽は照るし、汗は容赦なく頬を傳つた。かくて炎熱に苦しみつゝも山頂の小道傳ひに縣道に出て、驛に歸る。歸りは團體で歸る1人35錢也、車中獲物を出し合つたり、乗客も冗談まじりにしたりする山の話も忘れ得ぬ若き日の思ひなきな

るこさであらう。かくて5月7日有益且面白い一日を終つた。

#### 第四十六回例会

期日 昭和八年五月二十六日

場所 合併教室

題

1. 誤れる食菌鑑別法 農三 野口君
  2. 霧ヶ峯山塊植物景觀 農一 吉江君
  3. 精米の話 松尾先生
- 幹事推薦 (補缺)  
茶話會

講演略記

(都合に依つて2かう初めた)

霧ヶ峯とは長野縣にあつてスキーでよく知られてゐる。諏訪湖の東北八ヶ岳に隣する所にある。(こゝ大体の位置を示して) 先第一にカヘテの類の非常に多いこゝ、濕原と原始林の點在するこゝが面白いこゝで、泥炭のある所は深さ8mもある所がある。車山の南にカラマツを植えたが麓の方は大きくなるが上の方は小さい、カヤは夏期8月頃眞白で原始林は9月になるこゝ紅葉する十月終には雪が降る程です。このスキーには去年から一日2,3千人を入れた又五月迄にも浴けぬ所があるが六月になるこゝ縁が一面に出て来る。

植物としてはミズナラ、ツミ、シラカバ、レンゲツツジ等があつてこの山は霧ヶ峯の名にフサしい霧が多い即ち濕氣の多い山で頂上迄濕地植物がある。六月の半には、サゼン草、セツテイグワ等が出、鎌池のヒアフギ、アヤマ、シモツケソウの群落があり、ヤナギランは7月の終には全員開化する又ワタスゲ、サギスゲ、の毛が擴つて

フワフワ動いてゐるのは美しい。ヤシウド ヤマウドは鎌ヶ池濕原にあつて高さが高い8月迄食はれる。又部分的に申すミズゴケ、十何種、鎌ヶ池濕原にはヒノキ、ノリウツギ、シラカバ等がある。3mもあるものを中心として一間一二間の直徑でツルコケモモ、レンゲツツツ、ヤマドリセンマイ等の大群落があつて其處のみは常に歩きよい由コバノケイソウの群落は6月—8月初に全部開花した又6.7年に一回しか一度に咲かぬ、基の方は一本でミズゴケの中にあつて枝が出てゐる。ツルコケモモ、ヒメシヤクナゲはこの濕原全部に汎つて生育してゐる。(ミ語り、花ミ群落に就いて語つた) 又動物ではマメシジミがあつて、これは米粒の半分位のことで砂の中にある。八島ヶ池に棲息してゐる。この邊は水すげの中に所々穴があつて危険である。コタヌキモ、鎌ヶ池にあつて浅い方のみにあるほか其他アケボノソウ、ノリウツギ、フエノハナアラビ等。

車山濕原 クロユリ 五十本 ミズガシラ1坪 キンバイソウ(八重)クレマユリ

モミは枝か地に並行して擴るため横からは斜に見える状態なる。ツルツゲは岩の上にはひ上りオホヤマレンゲは香がよい。コセンタチバナ、ヒカゲノカヅラ、ヒカリゴケの生育地を指して説明される。車山にはミヤマヒゴタイ、ミヤマオダマキ、ガンコーラン等を見られる。

又原始林に野火の入らぬ譯は石の中の草を焼いて迄まるものであつる。ツルコケモモ、コケモモの話をし山を荒

らす人の様子を話された。次いで野口君 題して「誤れる食毒菌鑑別法」元來日本は菌の生育に適するので従て其種類も多いのであるが、有毒のものミ食用になるものミを見別ける法は我國に通常行はれてゐる方法のべてみたい。これには外觀、臭氣、味に依るもので、我國では柄の所を縦に割つて見てスゲに割れるものは有毒とされてゐるが、學術的に根據のある譯では無い。例ハツタケ、アカハツタケは質はもろいが食用となる。又同族のドクハツタケ、ドクベニタケは有毒である。縦にさけるものでもアセタケなどは有毒である。

一般に色が鮮やかで、毒々しい色を呈するものは毒菌の様に考へられてゐるしかしこれは全般に通用しない。ドクベニタケ等はそうであるが、クラバリヤ屬は毒々しいが一般に無毒である。毒々しいものは誰も食つてはみないから、毒で無いものでも毒と考へられるのだ。例としてタマゴダケは色は毒々しい紅色であるが食用となる。又ベニテンケタケは間違つて食ふて死ぬものがある。ツバのあるものは一般に毒菌の様に考へられておるがあてにはならぬものである。ツバのない毒菌がある。又同様臭氣ミニガミ、カラ味では別けることは出来ぬ。例へばコタマゴテンケタケは、香も無いが毒菌であるスツボンタケ、カゴタケ、リンゴの臭氣があるけれども、惡臭を放つものは粘液から出る。臭氣は有毒無毒とは全々無關係である。

キシガサタケ、スツボンタケ等は中學校の教科書には毒菌とされてゐるが

支那料理に用ひて美味である。其他乳汁を含むものは一般に有毒とされてゐる様だが、チチヌケは白乳汁を含むにもかかわらず煮て食ふと淡泊の味でよい味のもの、ネバリケのあるものでも毒菌とされてゐるが、以上の様に我國では通俗的に行はれてゐるが非科學的で感情迷信から行はれておる様だ。

西洋では Silver spoon Test なるものが行はれてゐる。煮るとき銀の點を入れておく、黒變するか否かを以て試すのであつて、これは所謂腐敗してゐるときは蛋白質が硫化物になつてゐるから黒變するのであるから何等有害菌無毒菌のこゝには全く無關係だが其新舊を見別けるに適するのです。

次に菌の臭氣に就いて申す、これも人間は常に主觀的に見るので判別が出来ぬ」

酒精等に就いて嗅覺を刺戟するが其他について階級的に説明された。

松尾先生 精米の話 改題 米の漫談

先今日食ふ米の問題よりも國家的食物問題として見るに日本の食物としては米がよいのは

1. 地 質
2. 一定面積多量收穫(第二位)
3. 栽培技術が容易である

の三點で實に米は我々の命の親です。でこの名稱も イネ=命根 =飯根といふものであります。本論に入り、

#### 1. 精米の歴史

神代昔は玄米食、今より500年前 加藤清正の頃玄米であつた、徳川時代に百姓の白米食禁止をなしたことがあるが、元祿、享保年間に白米の起原はあつた。

精白米とするに果皮種皮、糊粉層、胚芽糠となる。

#### 3. 搗精方法

厚さの10—12%を脱げばよいが、元來其の脱げるものたるや、保護作用のものであるからこれを脱ぐには摩擦を必要とする。

#### 4. 胚芽米 半搗米

完全に精白してしかも胚芽を有するもの、精白のときはよく溝の部が残されるもので、第一に縦の方がへり次に市次に厚さが減る、17—26%

果皮のときは糠が出る、糊粉層のときは多く、溝は少く夫々糠が出る。

石粉入りの缺點とする所は、最蛋白質の多いアリュコーロン層を脱ぐ。

5. 米の消費 營養から搗き方を定めるには

1. 營養の點
2. 味を考る
3. 保存力の點

1に就いては 白米病の話、毒蕈、缺乏説等を説かれ、2の味は玄米より白米の方がよい、大体味といふものは品質、土質、氣候等に支配される。又晩生よりも早生

極端に大又は小のものよりも中程のもの

熱帯の産よりも温帯産

それより7 經てより搗粉を入れることが始まつ。

#### 2. 米の性質

- A 化學的
- B 物理的
- C 組織的

であつてCは形、大小、重さ、比重、剛性等であるが、これは精米の方には

あまり關係は無い様だ。

C. 組織的と申すものは一番關係があるからこれに就いて見るに

玄米

穀皮

果皮—表皮、中皮、葉綠層、縦細胞

種皮—

胚部

胚

この中皮は表皮の眞下にあつて(中果皮とも申す)その下に葉綠層を有し成熟するミアメ色を呈する。

縦細胞層

内果皮

管狀細胞層

内面表皮細胞

種皮は三四層から成つてゐる。

胚乳部を更に分けて

1. 糊粉層(アリユエーロン層)(澱粉)

2. 澱粉層(純粹)

古米より新米

砂質石灰質よりも粘土の米

粳よりも糯の方が美味とされてゐる。

3. 保存力に就いてみるに

籾の付いてゐるものは大變永い貯蔵が利くが搗精の進んであないものの方が保存がよい、で今日のものを今少し黒い程度にするさ何かにつけてよいのだ。例へて一例を申すならば

7分搗きにしたら1年に200萬石、一石30圓とするさ年6200萬圓の節約となるさ申す者もある。

かくして圓筒の中に廻轉するものを一分400回さして、5分—10分も精白した標本を廻わされた。

—其他の記事を略す—

### 臺灣其他特物展覽會

主催 リンネ會及び園藝會

期日 昭和八年六月三日

記

最初の試み、出品は各會員の外、温室からも大部出た。

場所は學校の講堂の二階、學生も先生も出品。

### 饅内學藝大會

場所 講堂

昭和八年六月三日

我リンネ會代表は幹事山口氏

題は 生態學的に見たる臺灣の動物

### 第四十七回例會

期日 昭和八年六月二十八日

場所 合併教室

題

1. 宮崎縣都於郡村青山三財川に於ける臺の紹介 農二 日高 醇

2. 昆蟲標本製作に就いて

農二 楠本 君

3. 臺灣小島蠶種御來會

農三 岩切芳郎

4. 霧島山之植物

遠藤先生

略記

山本君の開會の辭に始まり

1. 日高君

三財村さ都於郡村さの境である三財川の邊に於て、臺の大變に多く珍しい所がある、申島先生と共に行き調査致したものを御紹介します。

日本で臺の多い所とされてゐる所は數ヶ所ありますが、宮崎地方で多いのがこの三財川です、しかし今迄宣傳さ

れず、有名でなかつたのです。最多いのが5月20日—27.8日、種に依り又土地に依つて出る時期が異なるものである。

源氏螢は平家螢よりも一週間位早いといふ。

(地圖を掲げて地形の説明) ここの螢は好んでチナミササ、竹の類に止まる。一分間に二十六回明滅し、驚いたことには百回も明滅した。

一回光るのに三秒半位の割、で何が故に螢がこの邊に多いかといふと、彼等の密接な關係のカマニナの多いことに因る、このカマニナは非常に多くて一升や二升は平氣で取れる程だ。

書問は自分が光を有するから明るきを好まず、暗い部分に入つてゐる。即ち萎れた草の中等に入つてゐる様だ。時に火の玉を作り、螢合戦をなす、壯觀の由、ここは源氏及び平家である。

ここで螢の卵を紹介し、着生状態を示す、又カマニナを見せて、これに寄生することを説明した。

蛹の時代は2週間、成虫の期間も2週間、卵から出たるとは2m.m.で土に入る頃は20m.m.翌年の蛹の前になると40m.m.位となる。

幼虫は寄生するために口器が頑丈で脊部に各節に黒色部がある。一生光るもので卵幼虫、成虫と光るものである。成虫は咀嚼性口器で腹部に黄色の部があるがこれが合は二個、早は一個ある。

源氏は4分5厘で、清流に住む。

平家は2分8厘で、汚水にも住む。三財川は流水である。何のために光るか。

## 1. 言語的作用

合が♀に近寄ると早く強く光る數回呼應して光つてから交尾する様だ。

## 2. 警戒的作用

この光は熱のない光で所謂100%の光である。

これは難しい問題を未だのこしてある。數多の學者が調べた。これが珍重されたことは支那にもある。又我平安朝時代より螢狩りをしたものゝ様である。源氏は宇治に多い。

螢は宮入具(日本往血吸虫ノ寄主)に寄生するが、宇治ではこの螢を採取して口に入れておき後一杯になつてから袋に入れる。これは決して毒にはならぬもので死んだものは藥屋にて粉にして色々の藥にするのである。

産卵するのは昔であつて三種位あるミヤベゴケ、ヒラサナダゴケ、其他一種

## 2. 楠本君

私は昆蟲採集を初めてやる人の参考として御話します。鱗翅目は假死の状態にして三角紙に入れるので膜翅目のものは十五日位展翅にかゝる、双翅目のものは展翅はしてもしなくてもよい脚を實際の様にする様に注意しはりつけにしないこと、鱗翅目は後翅の前縁を水平にし片側のみ展翅するものもある、又色の變色するものは豫め記載するのである、鞘翅目は右の翅の基部を止める、直翅目は大きいもの及び腹部の柔いものは内臓を出してアルコール・フォルマリンを浸せる綿を入れる。バッタは側面から切る、觸角の長いものは後の方に整理する。ナナフシの如きものは草の心を入れる。

### 重装式

カバーガラス

紙

雲母一昔多く用ひられた、今修繕に使用。

セルロイド板一最よいと考へる。

糊 アラビヤゴムは着色する、不易糊、バルサムは毛が見えぬがアレバラトに用ひられかけてゐる、バルサムより乾燥が早い、タラカンドゴムは跡が残りず償が安い。重装式の紙は三角の方が便利だ。

### 3. 岩切君

鳥の箱を五つならべて、臺灣の小鳥に就いてと題して話す。十姉妹は野生にないもので一箱に入れても争はぬ所から十姉妹と名づけられた。徳川時代に作られたもので、飼ひ方は最も容易なるものである。

黒—白地に黒點、茶—白地に茶

白—純白、三毛—三毛混合

近時この研究盛となり、梵天十姉妹といふものもある。頭に四方に毛を伸ばしてゐるものであつて更に、二重梵天千代田梵天、卷毛が甚しいものです。♀早別は雛などは外觀で見別けがつくがこれの♀はよくきえする、♀の聲はヒ—と優しく、♀の方は濁つてゐる。目の色が黒目、茶目があつて茶目は將來失明する。播餌鳥では、禾本科のヒエ、キビ等で、箱は1尺1寸×1尺2寸(横、高)前口1尺、又前のみ網を張るものもある由。

又鳥を飼つてゐるご卵詰りなどが起るが、これは石灰分の不足に依るものである。(中略)

次に臺灣スズメは♀早同色で見にく

いものだ。

又臺灣の金腹と琉球の金腹は多少異つてゐる様である。即臺灣の方は黒色部がある。

銀腹は♀早別は慣れると外觀でよいが、毛色の濃いものと淡いものまで見別けられる。

縞金腹は黒と褐色とを混合した色で十姉妹と鳴聲は全く同じ、他のことからしてもこれは十姉妹の原種と考へられる。

銀嘴 マレイ、スマトラ原産、巢引容易、♀銀嘴は♀早十姉妹のF1は生殖無能力だが毛は銀嘴に似てゐる。

### 4. 霧島山と植物 遠藤先生

「主として一年の諸君に對してであります」が前おきして話さる。

霧島山と申すものは一山でなく數峯の群であるとして圖を示された。

この山の特質と申すならば、

1. 山の形が面白い又小面積に火山の多數集合さる等地質學的に面白い
2. 火山湖の多いこと、御池。大浜池。大瀨池。六觀音池。御池は熱帶湖で他は皆寒帶湖。

### 3. 天然紀念物に富むこと。

例 白鳥山の一部分、野海棠、狭野神社の杉並木、佛法僧。

### 4. 原始林に富む。

韓國の西北、夷守岳など最もその代表的である。

### 5. 植物生態的に面白い。これの研究場所としてよい。

### 6. 歴史的。

天孫降臨は西白杵の高千穂とされてゐるが、王子原は神武天皇御出生の地とされてゐる。

尙温泉は鹿兒島側に多く、現在、この山は國立公園である。

植物に就いて申すに、

1. 山麓 農耕地 次が牧場
2. 上部 常緑の潤葉樹
3. 中腹 モミ、アカマツ、落葉潤葉樹
4. 更に上つて 落葉潤葉樹
5. 灌木地帯 8合目 ここは御花臺がある。

ここには ホソバノヤマハハコ がある。マイヅルサウ、クサアザサイ、ヒメコウモリ、ダイモンゴサウ、アキノキリンサウ、ツクシヒゴタイ、ツクシゼリ、などがある。

これ等の中で特に重要なものは、ミヤマキリシマである。霧島全山に分布してゐる。

新燃は火口をめぐつてミヤマキリシマのみで最よい場所である。又霧島山麓の櫻草は恐らくこれの南限であらうし、更に霧島東神社の虎斑竹、この菌は日野先生に依て命名された。尙瀬姫竹もその附近にある。其他に

杉並木、大幡の榊林も有名である。

次に茶話會に移つたが、宮澤先生の「つゞじ」の話があつた。

出席者87人(中 卒業生1、先生5)

#### 第四十八回例會

期日 昭和八年十月二十三日

場所 合併教室

題

- |                   |         |
|-------------------|---------|
| 1. 滿洲談            | 農三 寺尾 君 |
| 2. 卵の話            | 畜二 山中 君 |
| 3. 蜜柑の話           | 松原先生    |
| 6 時半の豫定の所農一の運動會應接 |         |

の練習で出席者が余り少いので7時迄

待機、早い人に氣の毒、ここに定刻に、御出席の北尾先生に申譯なし。

講演略記

#### 滿洲談

先土壤は滿鐵農事試験場は「窒素に乏しく不溶解性多く、マグネシヤ粘着性で、物理的には、佳良ならざれ共、化學的には良好である」と云つてゐる作物は土壤に支配される従つそれが異なるにつれて北は、小麥、大豆、エンドウ、南は落花生。

二百年來の乾燥農業で作物で決定してゐるし、地表の濕氣をにかきぬ様に努めてゐる。

機具等も農法も、皆よく適應したもののみがこのつてゐる様です。(米作に就いて話し減反案に論及した)滿洲國人は水に入るのを好まず殊に女子は甚いので鮮人の専業である。

日照時間は充分但温度急激な變化のため殆ど北海道と同様、又6.7.8月の雨量は充分。

1石の生産費 6圓43錢 日本 約21圓00錢、税は地主、糞、糶は小作者取り賃金は男35錢、女20錢、牛 一頭1圓20錢 又、上流と云はるる階級はセイタラの極をつくすが、一方農民は十圓で一ヶ月數人を支える様な慘めな生活よく種子を食ひ油こひものを食ふが淡泊なものも食ふ。

卵の話

鴉卵利用比較するに(年)

明治40年(一人當)	15
大正 3年	16
大正13年	36
年	40

圖の使用を比較するに(昭4)

カナダ	313
アメリカ	204
イギリス	110

## 用途

飲食店	25%
工業用	10%
一般用	30%
菓子其他	35%

## 構成成分

水分	82.27%
蛋白質	3.39%
脂肪	3.68%
乳糖	4.94%
灰分	0.72%

支那卵より日本卵、大卵より小卵の方がよい。小卵は卵黄が割合に大であるから。

形 55 m.m × 40 m.m

重 55 gr — 80 gr (極少 30gr)

60gより大を大、50gより小を小、

其の中間を中卵といふ。

比重 新卵	1.08
産卵后 1—3日	1.090
10日	1.072
20日	1.053
30日	1.035
70—80日	1.000

## 異常卵

1. 變形卵	5. 重胎卵	9. 接續卵
2. 矮小卵	6. 二重卵	10. 反對卵
3. 軟殻卵	7. 三重卵	
4. 卵白卵	8. 三胎卵	

## 卵の新舊鑑別法

1. 表面の状態
2. 振つて濁音の有無にて
3. 水に入れて静止した場所角度に依つて

腐敗又は腐敗しかけてゐるのは、投射して見たとき黒い部が見える。

## 蜜柑の話

## 種類は

Citrus	柑
Fortunlla	金柑
Poncirus	枳殻

原産地は支那か、南米ブラジルかであらう。

温州蜜柑の原産地は雲州であるといふ人もある。

支那のには種子があるが日本には無いで違ふのかも知れぬ。

紀州蜜柑は支那から来たので、最初熊本の小濱に入り次いで九州の次ぎに岡山に入った。

大分縣の大木、福岡縣の古木より300—400年は経たころと推測出来る。温州に就いての學名はロシア人及び田中長三郎先生の研究がある。

米國、支那には出来ぬ、又臺北等のはよくない。これに7系統あつて改良温州と云ふのは伊木力さ同じで、果大きく糖分多く、酸が少い。

元原産は廣島とされてゐたが本當は大分である。これは

1. 枝が膨れる
2. 葉が縮む
3. 油房が粗い
4. 皮が薄い

いふ様な特性がある。

次には北尾先生が果物のお話をして下さつた。

## 第四十九會例會

期日 昭和八年十一月二十八日  
場所 合併教室

## 題

- |             |      |
|-------------|------|
| 1. 仙臺の埋木    | 澤口君  |
| 2. 磯村農場     | 清山先生 |
| 3. お話       | 北尾先生 |
| 4. 小鳥數種又御來會 | 岩切君  |

## 講演略記

## 仙臺の埋木

越路山(仙臺の西)佐伯山附近にあつて

越路山 1 佐伯山 4 大年寺山 2  
計 7 の坑である。

人夫40人、女8人(運搬) 8時—4時、一人で200貫—700貫、共に出る亞炭は風呂用1貫4錢、一回分2.3貫でよい。

埋木は亞炭の層の間にはさまれるのだが、厚さ1尺—7.8寸、主に茶托、盆床飾等を作る。採掘後一年位天井で乾して後加工する。

出した當時は一貫2錢位だが市に出すときは一日全收量5000貫中埋木100貫で、20—50錢(貫)となる。トンネル式で掘るか今佐伯山はつきて了つてある。

## 磯村農場

色々を創立した當時のこゝ及現況を御話しの後、缺點として

1. 非常にお互に移住者が喧嘩する、言葉の不自由な故であらう。
2. 移住者がよほど良好な土地と思つて来て案に外れて悪い。
3. 来る人は大抵精神的に妙な人が多い定農夫制でない。
4. 管理者も利益本位に考へれば駄目だといふ事を話された。

## 北尾先生

民族人類の御話の後、今日は人種學的には純粹な人種は無く、民族さは共

通の文化を有する一團の人間の事で

人種

民族

國民

の別、例えば日本人といへば民族は異なるが同一國民であり、米國民は國民は同じでも人種が異なる様なもの。ロシアドイツ、ポーランド等の風俗の御話の後、佛國が余り中央集收にすぎりが反對に獨乙では地方分散で、底力があるといふ事だ、又ホツトラが、天下を取つた當時の話、軍備の話、又ユダヤ人の性質、現状、習慣等を御話し下さつた。

そして要するに人間は御互に、毛色の異つた奴は嫌ひなのだから、人種問題に未來永久に解決せず遂には喧嘩となるのが當り前なのだ。

西洋人の横暴は甚だ激しいのだが、日本と支那とはお互に聯絡せればならぬのに、日本は四面楚歌の聲の状態だ物質文明、科學、藝術等は遺憾ながら我國よりも西洋の方がすぐれてゐる。しかし日本精神は全く世界第一である。と語られた。

## 岩切君

オーストラリア原産の錦華鳥、同じく尾長錦靜鳥、及楓鳥、青紅鳥、カリフォルニア原産の牡丹鸚鵡、尾短ホタメインコ、綠色—黒牡丹鸚鵡、襟黄黒ホタメインコ。等に附いて面白く其の形狀、色彩、習性を話された。

茶話會では宮澤先生の嶺峯近くに南壽の様なよい景色の所の御紹介された

## 第五十回記念總會

期日、昭和九年一月十三日午後一時

場所 校友會館階上  
題

1. 茶の挿木 菱田君  
2. 上野動物園見學記 谷藤君

講演略記

豫定の田原先生缺席のため上二者の次に松原先生に御話を願ひ、次に幹事推薦

- 新幹事 農二 日高君 農一 楠本君  
林二 大村君 畜一 中野君

續いて

宮澤先生の御話

日高君が新幹事の挨拶

北尾先生の懷古談

秋吉先生の漫談

四本先生の懷古談

松村先生の「糞」漫談

日野先生の御話、會に就いての御注意、科學論文の書き方等の注意すべきこと其他年始狀の事等に就いて御話下さつた。

山口君、次會に會計報告をなすことを告げ會を終る。

講演

1. 茶の挿木

茶の原産は明らかでないが、我國に初めて栽培されたのは最澄で支那から傳えた、又僧の榮西も支那からこれを傳へ、母の屋に植えた、これが宇治茶の初めといふ。

繁殖法は色々ある中挿木の實驗法霧島土の三股、ホラフ、銀砂を用ひ、性質上毎日灌水する、季節に依つて癒合組織の出來方が異なり、根の出來方も色々ある。

發根力は5月—7月に挿したのが最もよい。

5月23日挿したもので、2月後4cm  
3月後には10cm以上のものもあつた。

これは活着力 100%で

新しい形質や、優良な形質を確實にのこされる早く苗が得られる。

等の長所がある。

2. 上野動物園見學記

先づ同所の沿革を話し

オホアリクヒ、丹頂鶴、蒙古馬、ウシウマ、シマウマ、水牛、熊、北極熊、オットセイ、鹿の類、虎、豹、ライオン、象、河馬、アナウミガメ、ニシキヘビ、ワニ、ヤシガニ、ペンギン、ツラフ、其他に就いて同君の實習中に見聞きした事の中夫れ夫れ食物、設備習性等の話をした。

校内學藝大會

時期 昭和八年十二月十六日

場所 本校講堂

リネ會代表は 農二 日高醇氏

題は 「植物の精虫」啓林、園藝會に次いで第三位。

本年度出席者數

第四十五回	130人
第四十六回	90
第四十七回	85
第四十八回	64
第四十九回	98
第五十回	57

編 輯 後 記

宮崎リンネ會は本校に於ける最も古き學會として既に例會も五十回を重ね、會誌も第八號に達した。まことに嬉しい次第である。今後最も最優最大の學會としての聲譽を築きぬやう努力せねばならぬ。

第八號の原稿は集りが頗るよく、編輯子もその採否に悩んだほどであつた。限られた經費では如何とも致し難いので、約十篇を次號に廻さればならなかつたのは實に遺憾であつた。該稿の筆者諸兄に深くお詫を申し上げます。

原稿の質も年一年と目に見えて良くなるのは喜ばしい。本號に採録された記事から見ても、何れも自己の体験と實驗によるものであつて、既往の號で見たやうな啓蒙論文や焼直し論文が影をひそめてしまつた。従つて、何れも金玉の文字で専門の學者の参考にもなるべき貴い論文ばかりである。將來も斯くの如くありたいものである。

本號から要録欄を設けてみた。斯くの如き學術的寸報も亦有益なものと考へるこの欄へも投稿を切望する。

最後に編輯子としての希望を述べさせていただきたい。原稿を拜見すると冗舌があまり多いやうに思ふ。科學には冗言は不要である。例へば、宮崎縣の紹介を文首に長々述べたり、紀行文のやうな採集記を目錄の序言に述べたり、蛾の研究は藝術的に見て如何だとか理屈をこれたり、この論文は斯ういふわけで思ひ出の深いものだと云つて因縁を付け加へたり、必要もないことが書いてある。科學論文には斯んな冗言は不必要である。次に氣のついたのは、無用の謙辭である。斯んなつまらぬ論文が参考になれば幸であること書いてあるのもあつたが、つまらぬ論文ならば出すには及ぶまい。また、甚だ不完全なもので申譯ないこと書いた人もあるが、そんな不完全ならば投稿には及ばぬ筈である。又學名を記さなかつたのが残念なこと書いた人もあつたが、残念ならば遠慮には及ばぬ、書いて出せばよいのである。此等は皆無用の謙辭である。少くとも科學論文を書いたならば、責任感と見識だけは持つてゐて貰ひたいものである。

次に、赤インキ、赤鉛筆は決して用ひぬやうに願する。執筆後の訂正も必ず黒インキで願ひたい。赤インキを用ひられると、編輯子が原稿上に印刷上の指示を書き込むのに納れ易くて閉口する。原稿は如何なる場合にも赤インキは用ひぬものであること知つて置いて戴きたい。

次に、原稿の書き方もよく既往の會誌を参照して正しく書くやうに願する。よい丁寧な原稿はどれだけ編輯上の手間が省けるかわからぬ。又、印刷費もすつと廉くなるのであるから、是非この點は懇願して置きたい。

長々編輯子の不平を述べたが、諸兄も亦編輯子に對して御不平があることであらう。それは遠慮なく幹事に申出ていただきたい。よりよい會と會誌をつくるためにお互に努力して行きたいと考へてゐる。

筆を擱くに當つて、諸兄の健康と會の隆昌を祈つてやまない。

(昭和九年一月十五日編輯子記)

|||||  
 投 稿 規 定  
 |||||

1. 生物學に關係ある論文で、獨創的なものであること。
2. 生物に關係ある寫眞、スケッチの類も歓迎する。
3. 論文中の挿圖は必ず墨書のこと。
4. 假名は平假名、外國語は原語又は片假名書のこと。動植物名は片假名書が都合よい。
5. 論文は本會規定の原稿用紙に書くこと。
6. 紙上匿名は許さない。必ず科年姓名を明記すること。
7. 原稿の取捨は幹事に一任のこと。
8. 原稿送附先は、宮崎高等農林學校宮崎リンネ會編輯部宛のこと。

昭和九年二月十五日印刷  
昭和九年三月一日發行

發行所 宮崎高等農林學校リンネ會

編輯兼 發行者 リンネ會編輯部

印刷者 壹 岐 晴 繁  
宮崎市高千穂通二丁目

印刷所 平和印刷所  
宮崎市高千穂通二丁目